居候は吸血鬼

流離う旅人

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは生きる意味を失くしていた吸血鬼と独りぼっちだった少年の話。

二人の出会いは偶然だった。けれど、その出会いは二人にとってかけがいのないものになっていく。これは二人が紡いでいく物語。

それを、ここに綴っていこう。

目次

少年と居候 ―― 1
吸血鬼と休日 ―― 19
少年と学校 ―― 40
吸血鬼と人形使い ―― 58
少年と仮契約 ―― 88
吸血鬼と学校 ―― 115
少年と修行 ―― 134
吸血鬼と学校祭準備 ―― 151
少年と学校祭 ―― 166

少年と居候

――ピピッ、ピピッ、ピピッ。

枕元に置いてあるスマホから、早朝を知らせる電子アラームが鳴り響く。その音に反応して、大きく膨らんだ布団の中から電子アラームを止めようとする腕が伸びた。

しかし、布団の中から腕しか出していないせいで、なかなか止めることができない。けたたましく鳴り響くアラームにつられて、腕の動きが乱暴になっていく。

いい加減布団から出ればいいだけの話なのだが、布団から出ることを、まだ眠気の残る身体が拒絶している。身を包むこの温もり、布団の魔力には何人も打ち勝つことができないのだ。

そんな風に、もたついているのがいけなかった。

「うるさい……」

「グホッ!?」

小さく、煩わしそうな声が聞こえた。そして、同時に鈍く重い音が部屋に響く。

音の正体は今しがたベッドから落ちた青年だった。先ほどからアラームを止めようと奮闘していたのが、彼である。

彼は蹴られた背中をさすりながら、ようやく鳴っているアラームを止めると、背中を蹴りつけた犯人を恨みがましく睥睨する。

布団にはもう一人。女の子（幼女）が眠っていた。

絹のように滑らかなプラチナブロンドの髪。人とは思えないほど、白く見える艶やかな肌はまるで陶器のよう。その姿は、精巧に造られた西洋人形（ビスクドール）を彷彿とさせる。

昨晩、彼が床に着いた際には一人だったため、どうやらこの下手人は夜中に潜り込んできたらしい。彼の名誉のために言っておくが、決して彼が連れ込んだ、というわけではない。

今でこそ、布団に潜り込んでくる程度には彼女と信頼関係を築けているが、出会った当初は手負いの獣の如く常に警戒されていたため、二人の間にはギスギスとした空気が漂っていたものだ。

それが今では？のようになくなり、寝床を共に――彼女の一方的――しているのだから、人生何があるか分からないとはよく言ったものだ。

彼女は先ほどの不機嫌な声とは打って変わり、とても気持ち良さそうに眠っているのだが、その格好に問題があった。彼女は今、ワイシャツしか身につけていない。それも身の丈に合わない大きなワイシャツ。言わずもがな、彼のワイシャツだ。

彼は、幼女に興奮するロリコンではないので一ミリも気にしていない。気にしていな

いったら気にしていないのだが、もう少し慎みを持ってほしいものだ、と嘆息する。
いくつか文句を言ってやりたかったが、あまりにも気持ち良さそうに寝ているので、投げかけようとした文句を呑み込む。
そして、そのまま彼女に布団を掛け直すと朝食の準備のために、彼は頭を掻きながら部屋を出た。

――これが彼、佐藤浩太の日常である。

浩太は洗面所で顔を洗い意識をはっきりさせると、早速朝食の準備に取り掛かる。
冷蔵庫を開けると、週末ということもあり、ほとんど何も入っていなかった。今日は買い出しだな、と考えながら残っていた卵とベーコンを取り出す。これだけでは足りないと、常備してあるインスタントのスープを作るためにお湯を沸かす。その間に卵でスクランブルエッグを作り、ベーコンをこんがりと焼いてしまう。
だんだんと香ばしい匂いがしてきて、空腹を刺激していく。できあがったベーコンとスクランブルエッグを皿に盛り付け、沸騰したお湯をカップに注いで朝食の完成だ。
テーブルに朝食を並べて、満足気に首肯をひとつ。

「朝はこんなもんか。あとは、あいつを起こすだけか」
浩太は、まだ眠りこけている居候を起こすために、再び部屋へと向かった。
静かに階段を上がって、二階にある部屋の前まで来た浩太は、一応ノックをしてみたが反応はない。ため息を吐いて部屋に入ると、案の定、彼女の規則正しい寝息が聞こえる。
浩太は眠る彼女へと近付くと、小さく肩を揺すった。
「おい、そろそろ起きろ」
「……まだ眠い」
「もう朝食もできてるから、起きてもらわないと困るんだが」
「……んっ」
「いや、何だよその伸ばした手は？　さっさと自分で起きてくれ」
「んっ！」
「わかったよ……」
浩太の声で、少し目が覚めた彼女はだるそうに手を伸ばすと、抱いて運ぶように求めてきた。一度は断ろうとした浩太だったが、語気を強めて引く様子のない彼女に折れることにした。朝から無駄な体力を使いたくないのだ。
要望通りに、彼女を抱え上げる。

彼女自身十歳ぐらいの体格なので、高校男児である浩太が抱え上げることは造作もない。抱き上げた彼女は、花のような甘い香りがして、いつまでも嗅いでいたいという衝動に駆られるが、頭を振って追い払う。

そして、彼女を落とさないように態勢を整えると、ゆっくりと階段を降りていく。

「おい、そろそろ起きて自分で歩けって」

「……うるさいやつだな。私のような美少女を抱けるのだから、もう少し大人しくしていろ」

「自分で言ってどうするよ。ほら、降ろすから顔洗ってこいよエヴァ」

彼女の名はエヴァンジェリン・A・K・マクダウェル。

半年ほど前、浩太の家の前に彼女が倒れているところを浩太が助けたのが、二人の出会いだった。

彼女は、並行世界からやってきた魔法使い、らしい。それも、かなり高位の。

なんでも、こちらの世界には存在しない麻帆良という場所の警備をしている際、侵入してきた敵を返り討ちにした。

そこまでは良かったのだが、最後敵が苦し紛れに発動させた空間転移の魔道具で逃走を図ったようだが、運の悪いことに魔道具が暴走。異次元の扉が開き、そこに吸い込まれてこちらの世界に流れ着き、行き倒れていたところを浩太が見つけたのだ。

浩太も最初は何を馬鹿な、と鼻で笑った。
それがエヴァの癪に障り、彼女の異能によって体の自由が奪われ、意志に関係なく握りこまれた自分の拳が顔面を撃ち抜くという結果となった。
しかも、彼女にはなけなしの魔力しか残っておらず。それを絞り出してしまったせいで、彼女は魔法等が使えなくなってしまった。どうやら向こうの世界で受けた魔力を封じられているようで、それがこちらでも健在だと彼女が嘆いていた。
酷い目にはあったが、実際に体験してしまっては彼も信じる他ない。
今のままで帰る手段は愚か。全く知らない世界で、誰の助けも得られず、その日を生きていくだけでも困難だろう。
そのため、元の世界に戻るまでの拠点として、我が家に居候しているのが現状だ。
「ちっ、わかったよ。いや、待て。降りる前にやっておくことがある」
「は？　お前まさか」
「そのまさかだよ。んっ……」
「っつう！」
悲しいかな浩太が気付いた時には、時すでに遅し。
エヴァは大きく口を開けると、通常よりも長く鋭い犬歯を光らせ、首筋へと噛みついた。鋭い牙が皮膚を突き破り、血管に侵入する。噛まれている箇所から鋭痛が走り、彼

の顔が歪んだ。
ジュルジュルと、血を啜る音が耳に響く。
血が吸われるにつれ頭がぼっーとして、体がふらつく。それでもエヴァを落とさないように、強く抱きしめた。彼女も同様に首に回した腕に力を込める。
十分に血を吸ったエヴァは恍惚とした顔をして、首筋から口を離す。
牙で貫かれた穴から血が滲んでいるのを見て、最後にもう一度だけ、ペロリと首筋を舐めた。
「……っはぁ。本当に、お前の血は美味いな。毎日飲んでも飽きん」
「それで毎日貧血になる、俺の身にもなりやがれ。……早く顔洗ってこい」
「クククッ、わかったよ」
エヴァを降ろすと、不敵な笑みを浮かべながら洗面所へと歩いていく。
そう。今の行為でわかってもらえたと思うが、彼女は異世界からやってきた魔法使いであると同時に、本や映画で出てきて人間の血を吸う吸血鬼である。
別に血を吸わなくても問題はないらしいが、彼女の魔力の回復兼嗜好品として吸われている。最初こそ魔力を回復させる目的が強かったのだが、今では絶対に後者が目的に違いない。そのおかげで、毎日が貧血気味になることは必至だった。
言ったところで止めてはくれないだろうなぁ、と浩太は長いため息を吐き出す。

「いささか物足りない気もするが、美味かったぞ」
「何が物足りないだ！　飯食う前に俺の血吸ってんだから文句言うんじゃねえ」
「あれだ。血は別腹というやつだ」
「分かり切ってることだけど、この世界のどこ探してもそんなこと言うのはエヴァぐらいだろうよ」
からかうように言ったエヴァは、ニヤニヤと笑っている。
それを呆れた目で見ながら浩太は食器を洗っていく。
「浩太、今日の予定はどうなんだ？」
「今日は学校もないし、バイトが終わったら買い物して帰ってくるよ」
「そうか。じゃあ、今日も体術の修行だ」
「本当にお前って、人に鞭打つのが好きだよな。貧血でだるいのに、体術の修行入れてくるんだからマジで死ねる。少しは弟子を労わってくれよ」
そう。浩太はエヴァに師事している。
興味があったこともあるが、何より強くなりたい。それが、一番の理由だろう。
彼女も借りを作りたくなかったようなので快く引き受けてくれた。とても、イイ笑顔

で。この時は何も思わなかったが、この後の修行で身を持って理解することになるのだが、それはまた別の話。
「お前から修行をつけてくれと言ったんだ。弟子は黙って、師匠の命令を聞くものだぞ？　それが嫌ならしょうがない。頭を地に擦りつけて足を舐めろ。それなら、考えてやらんこともない」
「いや、それお前が楽しいだけだろ⁉？」
「お前からしたら美少女にそんなことが出来るんだから、ご褒美だろ？」
「俺はロリコンじゃないからな？　ご褒美になんかならないからな⁉」
嗜虐に輝く瞳を向けてくるエヴァを無視して食器洗いを終えると、手早く外着に着替えて、忘れ物がないか確認してから玄関に向かった。
「俺はバイトに行ってくるから。家のことよろしく」
「ああ、台所の棚にあったクッキーは私がしっかりと食べておくから安心しろ」
「それ来客用だからな。少しは残しておいてくれよ」
「それは私の気分次第だな。せいぜい祈っておけ。そもそも、お前を尋ねに来る奴などいやしないだろ」
「ああ、これは残らないパターン。しかも、来客に関しては否定出来ない」
本日三度目のため息を吐く。

浩太はお茶菓子も買い足すことを脳内で付け加えながら、靴を履いて立ち上がる。
「それじゃあ、いってきます」
「ああ。……いってらっしゃい」
玄関を出る際に、小さくか細い声が聞こえた。浩太は振り返ることはなかったが、口角が少し緩んだ。
今日の晩御飯はエヴァの好きなものでも作るか、なんて考えながらバイトへと走り出した。

☆☆☆☆☆

「行った、か……」
一人になった家の中は静まり返っていて、エヴァの声だけが響く。
以前なら感じなかった寂しさが胸中を満たす。彼女は、それを紛らわせるように、居

間のソファーに身を投げた。
腕で目元を覆い、今日までのことを思い返す。
「この世界に来て、もう半年、か。早いものだな……」
この世界に飛ばされる前、エヴァは麻帆良の警備をしていた。
いつも通り、侵入者を軽く捻るだけの簡単な警備だと侮っていた節は、否定できない。その油断が敵に魔道具の使用。暴走を許すことになり結果、彼女はどことも知らぬ世界に飛ばされてしまった。
だが、高位の魔法使いであり六百年を生きてきた吸血鬼である彼女にかかれば、元の世界に帰えることは造作もない。
平行世界に来たが、彼女を麻帆良に縛りつけている〝登校地獄〟は、未だ健在。つまり向こうの世界との繋がりがあるため、帰ろうと思えばそれを頼りに帰還することができるだろう。いつも解きたいと思っていた呪いが、帰るための鍵となるのはなんとも皮肉が効いている。
しかし、それも魔力や精霊の存在があればの話。
登校地獄がこちらでも効力を発揮しているため、本来の魔力と吸血鬼の力が封じられている。今のエヴァは、そこらにいる人間の少女と変わらないのだ。
魔力に関しては浩太の血を吸えば問題ない。彼の保有する魔力は、《千の呪文の男（サウザンド・マスター）》と

謳われるナギ・スプリングフィールドと遜色ないものだからだ。
だが、魔力の問題が解決したところで、この世界には精霊が存在しない。これは浩太を氷漬けにしてやろうとした際に、魔法が発動できなかったことで発覚した。簡単な魔法であれば行使することは可能だが、世界を渡るような大規模な魔法の行使は困難だろう。
――まあ、大量の魔力に物を言わせた脳筋的な方法ができないわけでもないが。
これだけ条件が揃っているわけだが、未だ彼女は戻る素振りを見せない。
浩太に稽古をつけている、というのもある。けれど、それは建前のようなもので、戻らない理由は別にあった。
エヴァが登校地獄によって三年間通った中等部を卒業してから数日後。
待ち人であるナギが死んだことを聞かされた。
その時から、全てに興味がなくなってしまった。呪いの件もあったが、ナギのことを少なからず、想っていたから。
最初の三年間の学校生活は、六百年も生きてきたから周りに合わせるのは大変だったが、今までの人生になく、新鮮なものだったと言える。
けれど、呪いのせいで、友人たちは私のことを忘れていく。その呪いさえも、ナギが死んでしまったことで、もはや解くことも叶わない。

彼には『光に生きろ』なんて言われたが、残ったのは絶望だけだった。
それからと言えば、怠惰に特に何をするわけでもなく日々を過ごしていた。
呪いのせいで学校には行かなければならなかったが、授業を抜け出して屋上でぼうっと空を見上げる。何をするにも、やる気が起きない。生きるための活力が燃え尽きたように思えた。
そんなだらけきった生活は、一年前に超と葉加瀬の発明である茶々丸を迎えてからは、身の回りの世話をさせることで改善された。
けれど、それだけ。根本的な部分は何一つ変わってはいない。
そんな時に、今回の事件が起きたのだ。
茶々丸だけは直前に放り投げたので、事なきを得たが彼女は魔道具の暴走によって、平行世界に投げ出された。
意味もなく当てもなく彷徨っていると周囲から奇異の目を向けられる。
しかし、そんなことは諦観に染まった彼女にとって、どうでも良かった。
どれくらい彷徨っただろうか。とうとう彼女は疲労で倒れてしまった。起き上がる気力もなく、そのまま彼女は眠るように意識を失った。
そして、出会ったのだ。浩太という少年に。
目が覚めた彼女は、布団の中にいた。キョロキョロと見回すと、倒れていた場所と違

い、どこかの部屋に場所が移っていた。
疑問に思っていると、部屋の扉が開く。
そこには桶とタオルを持った少年が立っていた。まだぼうっとする頭で導き出した答えは、少年が看病してくれていた、ということ。
彼女は跳ね起きて、彼へと詰め寄ろうとしたが、体がふらついて倒れてしまった。彼が駆け寄ってきたところに乱暴に胸倉を掴んで、叫んだ。
「何故、私を助けた⁉？」
何故、見ず知らずの自分を助けたのか、問いただした。
きっと、何か邪な欲望があるに決まっている。そうでなければ助けるはずがない、と。彼女は自分自身に、言い聞かせる。そうでもしなければ、助けてもらったことに、動揺を隠すことができなかったから。
それも、仕方のないことなのだ。助けてくれると思っていたナギは死んでしまい、近衛近右衛門やその他の魔法使いも心配はするが、誰も助けてくれなかった。手を差し伸べては、くれなかった。
優しくされるのが怖い。まだ虐げられ、蔑まれた方が良かった。それが、彼女にとっての当たり前だったからだ。
助けてもらったことに、動揺が隠せない。

だからだろうか。ここが平行世界で、彼女の事情を知る者が一人もいないということが、頭から抜け落ちていたのかもしれない。

いま思えば恥ずかしい話だ、と赤く染まる顔を手で覆う。

――話を戻そう。

突然掴みかかられ面食らった様子の彼だったが、それが徐々に呆れたものに変わっていきため息を吐かれた。

「あのなぁ？　何を怒ってるのかは知らないが。道端に倒れている子どもを放っておくほど、腐ってねぇつもりだぞ。まあ、お前みたいな子どもじゃなかったとしても助けたけど」

「それが例え、化け物だったとしてもか？」

「どうしてそんなこと聞くのかは知らないが、たぶん俺は助けるぜ？　もしかしたらいい奴かもしれないし、話してみたいと思う。化け物だって、一方的に決めつけてるだけかもしれないし」

まだ会ったことはないけどな、と彼は笑っていた。

彼女は、まるで雷に撃たれたかのように固まった。それだけ、彼の言葉は衝撃的だったのだ。

そんな彼のことを信じてみたい。我ながらチョロいという自覚はあるが、そう思って

しまった。気付けば、彼女は今日までのことを包み隠さず、事細かに話していた。
最初に話を理解してもらうために魔法使いについて話したのだが、鼻で笑われてしまった。
それ事態は、仕方ない。
仕方ないことなのだが、ほとんど無意識に彼のことを人形師のスキルで操ってしまった。鼻を真っ赤にして悶える姿を見て、流石にやりすぎた、と申し訳なく思っている。
そこからは実際に異能を体験した甲斐もあって、彼は信じてくれた。
自分が魔法使いであること。そして、吸血鬼であることも、全て。その上で、彼女のことを受け入れてくれたのだ。
どうせ恐怖するのでは、と内心思っていたのだが、すんなり信じられたので拍子抜けしてしまった。……内心では、ほっとしていたことは内緒だ。
二人は、そんな出会いを経て、今に至る。
だから、まだ元の世界に戻らない。
私にとって、彼の側はとても居心地が良かった。ナギといた時よりも、充実した時間を過ごしていると言っても過言ではない。
それに十中八九、近衛近右衛門が私を連れ戻す手段を講じていることだろう。
それまでは、もう少しだけ彼の側を離れたくないと、思った。

取り敢えず彼が帰ってくるまでは暇なので、今日の修行のメニューでも考えるかな、とエヴァは楽しそうに笑った。

☆☆☆☆☆

「ただいまー」
「全くご苦労なことだな。よくバイトに行きたいと思うもんだ」
「別に行きたいと思ってるわけじゃないが、働かないと金は発生しないから仕方ない」
「まあいい。そら、すぐに修行に移るぞ。準備して山に行くぞ」
「わかったよ。……ああ、そうそう。今晩は何が食べたい？」
「そうだな。お前の作ったものなら、何でもいいぞ」
「それが一番困るんだけども……」

腕の見せどころだな、と不敵に笑ってみせるエヴァに浩太は苦笑いを浮かべるのだった。

――これは吸血姫の居候と少年の物語。

この先、二人がどうなるのか。それは、神のみぞ知ることだろう。

吸血鬼と休日

今日は完全な休日。
学校もなく、バイトもない。
そして、ドS吸血姫様の鬼畜修行もない。一日中ゴロゴロすることを決めていた浩太は、惰眠を貪っていた。
しかし、その至福の時間も長く続くはずもなく。
ガチャリ、と部屋の扉が開く。
入ってきたのは、もちろんエヴァである。
イタズラを思いついた子どものように無邪気な笑みを浮かべて、そろりそろりと浩太へと近づいて行く。
彼女が黙って彼を寝かせておくだろうか？　いや、あり得ない。
浩太が寝ていることを確認すると、ニヤリとエヴァの口角が三日月のように鋭く持ち上がった。彼女は飛び上がると、そのまま彼の腹の上に落ちる。それも体重を乗せたイイものを。
当然、眠っている彼がそのことに気付くはずもなく、彼女の体は無防備にさらされた

腹へ沈み込んだ。
浩太は突然の衝撃に肺の空気が漏れ出して、「グボァ⁉?」という何とも間抜けな悲鳴を漏らした。その反応に満足したのか、エヴァはより一層笑みを深くする。
「ゲホッ、ゲホッ⁉　いきなり何しやがる！　今日は何もないからゆっくり寝れると思ってたのに！」
「私は暇なんだよ。だから、お前で暇を潰そうと思ってな」
「なんて傍迷惑な奴⁉　暇ならお前も寝ればいいじゃないか！」
「目が冴えていて今からじゃ眠れん。だから構え」
「無理にでも寝てください。おやすみ」
腹に乗っていたエヴァを放り投げて、再び眠りに落ちるために浩太は目を閉じる。彼女は取り合おうとしない彼に苛立って拳を握って振り上げるが、突如その行為をやめた。
そして、顎に手を当てて何かを思いついたようで。また悪い笑みを浮かべているではないか。
「わかったよ、お前がそこまで言うなら仕方ない。大人しく寝るとしよう。お前と一緒に」
「そうそう。俺と一緒に……は？」

「それじゃあ、失礼するぞ」
　言うや否や、浩太が抗議する前にエヴァが布団の中へと滑り込んでくる。それだけでは飽き足らず、足や腕を絡めてくるではないか。
「おい！　足を絡めてくるな。てか、布団から出てけ！」
「お前が寝ろと言ったから寝ようとしてるんじゃないか？　それとも何か？　私と密着して興奮でもしたのか？」
「俺はロリコンじゃねぇ！」
「前にも言ったが、私は不老不死の吸血鬼だ。こんななりだが、六百年を生きてるからな。合法だぞ？」
「事情を知らない世間からしたら十分アウトだからな!?」
　この状況が世間に知れ渡れば、浩太の社会的地位が失墜するのは、まず間違いない。それをわかってやっているエヴァは、もちろん確信犯である。揶揄うと面白い反応をするものだからついついやってしまう、と彼女は後に語る。
「ふう……」
「ひゃあ!!?」
「……」
「……何か言えよ」

「いや、随分と可愛らしい悲鳴を出すと思ってな」
「おい、ニヤニヤするな。徐々に近付いてくるな!?　やめてくださいお願いします！」
断る！　と言って、エヴァは浩太を辱めるべく、耳に息を吹きかけていく。更には、耳に舌を這わせてきた。
ゾクリと鳥肌がたつ。やられる側の彼からすれば堪ったものではない。
逃走を試みたが、すでに彼女が先手を打ち手足を絡めていて、身動きが取れなくなっている。もはや、彼は蜘蛛の巣に引っかかった蝶も同然だ。
このあと、休日の住宅街に悲痛な悲鳴が聞こえたと噂になるのだが、まだ彼はそのことを知らない。

☆☆☆☆☆

結局、あのあと街に出かけるという条件で、解放してもらった浩太だったが、すでに

疲れ切ってしまっていた。
ロリコンではない彼だが、息を吹きかけられたり、耳を舐められたりされることに耐えられなかったようだ。
現在、浩太とエヴァは街にあるショッピングモールに向かっていた。
彼の服装は黒のパーカーとジーンズの簡単な組み合わせ。チラリと横を見ると、彼女も自分に合わせたのか黒のゴシックドレスを着ている。
時折、風が吹く度にスカートが靡いているのだが、その度に周囲の男どもがどよめく。珍しい服装に驚いているのか、はたまたはこの街の男はロリコンしかいないのか。
……おそらく後者だろう、と浩太は結論付けた。
ちなみにこのゴシックドレスは彼女の手作りだったりする。
最初は服を買おうとしていたのだが、服ではなく布と道具を買わされて、彼女自ら仕立てたのだ。服を作れることには素直に驚いたが、普通に服を購入するよりも高くついたため、財布の中身が軽くなってしまった。
密かに根に持っていることは、自分の心の中に留めておく。知られてしまえば、修行で何されるかわかったものではない。ただでさえ辛い修行なのに、これ以上何かされたら堪ったものではないのだ。
浩太の思いも知らずに、隣を歩くエヴァは先ほどのあくどい笑顔ではなく、嬉しそう

に顔を綻ばせている。
エヴァの浮かべる笑顔に、思わず浩太は見惚れてしまった。
その笑顔は、とても綺麗だった。いつもこんな風に笑っていればいいのに、と思うぐらいに。
そして、視線に気が付いたエヴァと、目があった。
両者固まる。
最初に動いたのは、顔を正面に戻した浩太。それを見て、今朝と同じように悪い笑顔に変わっていくエヴァ。
「んんっ？　どうした？　まさかとは思うが、私に見惚れてたのか？」
「……そうだよ。見惚れちゃ悪いか？　普通にそのドレスは似合ってるし、可愛いよ。――黙ってればだけど」
「え、あ、いや、そうか。私に、見惚れてたのか……」
――え、何その反応。
浩太は思わず、口から出かけたその言葉を呑み込んだ。
彼の言葉――最後の方は聞こえていない――に動揺したエヴァは頬を赤く染めて、恥ずかしそうに手で口元を押さえる。
まるで、初心な少女のような反応。彼の隣には普段堂々としている吸血姫の姿はな

く、見た目相応の美少女がいた。
周囲には吐血する者、何故か満足したように倒れ伏す者が続出。彼女の普段の態度を知っている分、とても可愛らしいとは思う。
しかし、それよりもこの街の男たちにロリコンしかいなかったというショックの方が、酷く重く彼の心に突き刺さっていた。

その頃のエヴァの心中はというと、
(服、似合ってるって言われた。こういうのが好きなのか？　クソッ、もう少しスカートを短くすれば良かったか？　いやしかしそれだと他の男どもにも見られることになる。それは避けねばなるまい。そ、そそそういえばか、かわ、可愛いって言われた⁉　そんなことナギにも言われたことない！)
――と、いろいろとおかしくなっていたことをここに記しておく。

二人が落ち着いた頃。ようやくショッピングモールに到着した。
エヴァはまだ頬がほんのりと赤く、チラチラと浩太を見ている。
しかし、今の彼には彼女の視線に気付けるほど心に余裕がなかった。原因は周囲の視

線だ。
　エヴァがいるので、好奇の視線や愛でるような目を向けられるのは仕方がない。そのほとんどは彼女に向けられているからだ。
　では、何故彼は疲れているのか？
　それは、嫉妬や殺意を込めた目を向けてくるロリコン男どもが原因だった。
「お、おい？　その、迷惑だったか？　やっぱりその、家にいた方が良かったか？」
「……はぁ」
　浩太がため息を吐くと、エヴァの肩がビクリと跳ねた。
　六百年を生きた吸血姫の彼女だが、その反応はまるで叱られた子供のよう。
　彼女の潮らしい姿を見ていたら、周囲の目を気にして気疲れしていた自分が馬鹿みたいだな、と彼は苦笑する。
　浩太はエヴァを安心させるために頭をひと撫でして、手を差し出した。
「んなことねぇよ。周りの目が鬱陶しいだけで、お前のこと迷惑だなんてこれっぽっちも思ってない。ほら、折角来たんだ。早く行こうぜ」
「ッ、ああ！」
　満面の笑みを浮かべたエヴァは、浩太の手を取ると流れるように腕に抱きついた。これには彼も驚いたが、彼女が本当に嬉しそうにしていたので甘んじて受け入れた。

傍から見れば兄妹に見え、とても微笑ましい光景だ。……周りにいるロリコンどもの視線が強くなったのは、きっと気のせいだろう。気のせいだと、思いたい。

二人は来たのはいいのだが、特に当てもなくブラブラと歩いて回った。
行くと言った張本人であるエヴァが目的もなく、来たいと言っていたのだ。何故か問いただしたら、顔を赤くして怒鳴られてしまった。解せない、と浩太は思う。
当の本人は何の気なしに、少し前を歩いている。
こうして見ていると、どこからどう見ても普通の女の子だ。
けれど、彼女は六百年を生きる吸血姫である。
六百年。
言葉にするのは簡単だけれど、それは一体どれほど途方もない時間なのだろうか。
きっと、浩太にはわからない。
それはエヴァと同じ時間を過ごしたとしても、わからないだろう。共感できるものはあるかもしれない。でも、過ごした環境が違えば見てきたもの、体験してきたことは全く違うのだから。

本当の意味で、エヴァのことを理解できる奴なんてこの世には存在しない。
そして、エヴァは異世界の人間だ。いつか元の世界に戻ることになる。
そうしたら、以前彼女が話してくれた麻帆良という場所に『登校地獄』の呪いで、ずっと囚われたまま。
誰も、彼女を救う者はいない。そう、誰も……。
ギリッと、歯を噛み締める音が聞こえた。
浩太は知らず知らずのうちに拳も強く握っていたようで、血が止まり白く染まっていた。
ふう、と一息吐いて、心を落ち着かせる。
幸いなことにエヴァには見られていない。見られていたら、どう言い訳をすればいいか、分らなかったから。
そう言えば、と浩太は思う。
何故こんなにもエヴァのことを考えているのか、と。
自分にとって、彼女とは何なのか？
そう聞かれたら彼は居候兼師匠、と答えるだろう。それにしてはエヴァのことをよく考えている。
その答えは考えるまでもなく、すぐに出た。

きっと、俺は――。

「……い。おい！」

「ッと、悪い。どうした？」

「どうした、じゃない！　声をかけても反応がないから、無視されているのかと思ったんだぞ……」

「悪い悪い。無視なんかしてないさ。ちょっと考えごとをしてただけ」

「本当か？」

「本当だ」

ならいい、とエヴァは無視されたことに憤りが収まっていないようで、ずかずかと歩いていく。

その背中を浩太は小走りで追いかける。

――今出した答えを、胸に秘めながら。

☆☆☆☆☆

まだ興奮冷めやらぬエヴァの機嫌を直すために、彼女の新しい服作成の布を買ったり、アクセサリーショップや可愛らしいぬいぐるみを見て回った。

意外と少女趣味なんだな、と浩太は胸中で呟く。

口に出したら最後、酷い目に合うのは必至だろう、と考えながら。

回っている内にお昼時になったので、適当なファミレスに入ったのが数分前。今は注文した料理を待っているところだった。

浩太の正面には、仏頂面で紅茶を啜るエヴァがいる。

最初に頼んだ紅茶を飲んでから、ようやく直った彼女の機嫌は下降してしまった。

「どうしたんだよ？　不機嫌そうな顔して」

「ここの紅茶は駄目だな。まだお前が家で淹れる方が美味い」

「それはありがたいけど、あんまり大きな声で言うなよ？　それにファミレスにそれ以

上を望むのは厳しいだろ。家に帰ったら、俺が淹れてやるから機嫌直せって」
「ふんっ、約束だからな」
浩太は頬杖をつき、ふんっと、鼻を鳴らすエヴァを見て苦笑した。
どうやらここの紅茶は、彼女の舌に合わなかったようだ。
「お待たせしました。カルボナーラがおひとつ。ドリアがおひとつでよろしいですか？」
「はい、そうです。ありがとうございます」

スタッフが料理と伝票を置くと、頭を下げて戻っていく。
浩太がドリア、エヴァがカルボナーラだ。
いただきます、と目の前のドリアを口へと運ぶ。しっかりと咀嚼して、呑み込む。味に関しては、美味いのだが、まあまあと言ったところ。それはエヴァも同じようだった。
「やはり浩太が作る方が美味いな。ここのは、お前の料理の足元にも及ばない」
「だから、それはすごくありがたいけどさ。スタッフたちに聞かれるかもしれないんだから自重してくれ」
エヴァは文句を言いつつも、しっかりと食べている。浩太が作る方が美味いだけで、不味いわけではないのだ。それを口に出してしまうものだから、こちらとしては冷や汗

が止まらない。
「ふむ。そういえば最近、まさにこの瞬間を再現したようなドラマを見たな」
「そうなのか？」
「ああ。ドラマだと、この後強盗が入って来て占拠するありきたりな展開だったな。こっちもこの後強盗が入ってくれれば面白いのだがな」
「縁起でもないこと言うんじゃありません。だいたいそんなことが現実に――」
エヴァが突飛な話をし出したので、浩太がやんわり否定しようとした瞬間。
店内に轟音が鳴り響く。
それは日常には程遠いもので、誰しもがあまり聞きなれない音。
――銃声だ。
静まり返った店内に、砕けた照明の破砕音だけが空しく響く。
転瞬。浩太とエヴァを除いた客やスタッフが、パニックを起こして騒ぎ出した。
しかし、再び放たれた銃声に悲鳴はかき消されてしまう。
「うるせぇ！　大人しくしろ。お前らには人質になってもらうからなぁ。あまり傷つけたくはないんだよ。わかったな？」
覆面を被った男が銃を向けて、脅しかける。他にも同じように覆面を被った仲間が二人銃を持つ男の後ろに控えていた。

こんな状況にも関わらず落ち着いていられることに、精神が図太くなったなぁ、と感慨深い思いを抱く浩太。それもこれもエヴァのおかげだ。修行で痛めつけられることに比べれば、てんでたいしたことはない。

チラリとエヴァに目を向けると、浩太を見つめて悪い笑顔を浮かべていた。

「そんなことが現実に、なんだって？」

「やめろ。その言葉は今の俺に効く」

浩太はため息を吐きながら頭を抱えた。強盗が現れたことに対してではなく、強盗の出現に爛々と瞳を輝かせるエヴァに。

強盗が銃を持って現れることよりも恐怖を感じた、と後に浩太は語った。

「浩太」

「……何でしょうか、マクダウェルさん」

「あのバカ共を潰してこい」

「拒否権を行使します」

「そんなものあると本当に思っているのか？　ある訳がないだろう。だが、私は寛大だから選ばせてやる。ここで奴らを打倒して修行のレベルを上げるか、ここから逃げ出して修行のレベルを上げるか。二つに一つだ」

「どっちを選んでも俺の未来が地獄に繋がっている、だと。理不尽な二者択一だ⁉」

「早くしろ。更に過酷なものにするぞ？」
この吸血幼女……！　と浩太が恨めしく睥睨するが、エヴァは飄々と笑うだけだ。
ちなみにエヴァが覆面を倒せといったのは、折角の浩太と二人の休日を邪魔したからだったりする。完全な八つ当たりである。
ならばエヴァがやればと思うかもしれないが、浩太の成長具合を確かめることが目的なので、今回彼女が出張ることはない。
もう何を言っても無駄だと諦めた浩太は強盗たちを観察する。
敵は三人、覆面で顔を隠しているだけ。武装は銃だが、先頭の一人しか所持していない。後ろの二人は黒い棒状のもの、警棒を見せびらかすように持っている。
出来るか出来ないで言えば、鍛えられた浩太であれば十分対処することは可能だ。
浩太は瞑目して呼吸を整える。
丹田の辺りを意識して気を練り上げて身体能力を強化すると、体が羽のように軽くなるのが分かった。
気による強化を手早く行う浩太を見てエヴァは感心すると、自分が教えているのだから当然とばかりにうんうんと頷く。
そんなエヴァを尻目に浩太はそっと、体を下げて前傾になる。
「瞬動のコツは、大地を掴むように……」

足に力を込めて、気を爆発させる。
ふっ、と浩太の体がエヴァの前から消えた。
そして、次の瞬間には銃を持つ男の懐に飛び込んだ浩太が現れる！
男が浩太の存在に気付く前に銃を叩き落して、そのまま鶴頭で顎を跳ね上げた。脳揺らされた男は呆気なく意識を失い、地面に沈む。

男が倒れたことにようやく気付いた二人が警棒を振り上げて迫る。
強化された浩太にとって、その動きはあまりに遅く、スローモーションを見ているようだ。先頭にいる覆面の動きに合わせて、側頭部に上段蹴りを叩き込む。その一撃は、男を容易に吹き飛ばし、窓ガラスを突き破った。
「やば……」
大の大人を容易に吹き飛ばす脚力に、浩太は感嘆の息を漏らした。同時に、気で強化された体は凶器になり得ることを理解する。今まで比較対象がエヴァしかおらず、どれほどの力があるのかわからなかったので、仕方ないと言えば仕方ないのだが。
「お、お前ら⁉　テメェ何しやがった！」
「眠ってもらっただけだが？　いや、まあ一人やり過ぎたけど」
「クソが！　お前は危険だ、死ねぇ！」

「いや、武器持ってるやつに言われたくないんだが……」
男は警棒を激情のまま振り回す。
我武者羅な攻撃が、浩太を捉えることはない。気で強化された動体視力の前では、全て躱されて空を切る。
このままでは埒が明かない、と浩太は振り回される警棒を難なく掴み取ると、男をこちらに引き寄せて腹に掌底を叩き込んだ。
男は胃の内容物を吐き出しながら、膝をついてそのまま動かなくなった。
ふう、と一息吐く。
エヴァに目を向けると何が面白かったのか腹を抱えて笑っていた。この状況で笑えるのは彼女ぐらいだろう。
「私の弟子なら、たかだか雑魚三人一秒で倒してみせろ」
「まだ俺には無理な話だな、それ。それよりも早くここ出ようぜ？　もうそろそろ騒ぎを聞きつけた警察も来るだろうし。面倒なのはゴメンだ」
「それもそうだな。よっと、よし行くぞ」
「はいはい。わかりましたよ、お嬢様」
浩太は背中に飛び乗ってきたエヴァをしっかりと支えて、店を後にしようとした時、
「待ちやがれっ！」

怒声に振り替えると、最初に沈めた男が血走った眼と銃口を二人に向けていた。
強化された一撃を生身で受けたにも関わらず、まだふらふらとしているが男は立ち上がったらしい。存外、タフなようだ。

「これは私も想定外だ。まさか、ここまでタフだとはな」
「しっかりと決めたと思ったんだけどな」
「今後の課題だな。まあ、私以外と初めての対人戦にしては良くやった方さ」
「無視してんじゃねぇよ！　こっちは銃向けてんだぞ⁉　怖がるもんだろうが！」
「いやー、今更銃程度では怖いと思わなくなってまして」
「何なんだよお前っ。俺たちの邪魔しやがって！　折角の計画が台無しだ。このまま警察に捕まるぐらいなら、お前だけは殺す‼」
「気持ちいいぐらいの逆恨みだな。どうせ私たちがいなくても失敗していただろう」
「うるせぇ！ガキは黙ってろ！」
あ、バカお前。
浩太から滝のように冷や汗が噴き出す。
目の前の男は気付いていないが、エヴァを背負っている彼だからこそ分かった。
いま、エヴァはキレている、と。

彼女から漏れる威圧を一身に受けている浩太は泣きたくなった。
「……浩太」
「はい！」
「アイツ、ツブセ」
「イエス、マム！」
エヴァは、冷ややかな声で命令を下す。
浩太は考えるよりも早く返事をしていた。浩太も、命は惜しいのだ。
「最後の別れは済んだか？」
「ごめんな。俺も自分の命は惜しいからさ、少し本気で行くから」
「は？　本当に意味分かんねぇことばっかり言いやがってよぉ、さっさと死ねや！」
男は狂ったように叫ぶと、引き金を引いた。
発射された弾丸は真っ直ぐに浩太へと飛んでいく。
撃った男と見守っていた人々も、誰しもが浩太の死を疑わなかった。
しかし、当然そんなことが起こる訳もなく。
放たれた弾丸を浩太の強化された目は、しっかりと捉えれていた。
彼は瞬時に気で手をコーティングすると、人に当たる危険のない天井に向かって弾丸を跳ね上げる。

次いで腕を引きながら瞬動で一気に距離を詰める。男は何が起こったのかわからないという顔をしていたが、その呆けた顔に勢いの乗った拳を叩き込んだ。

しんっと静まる店内。

そして、ようやく状況を飲み込んだ人々から歓声が沸き起こった。その歓声に紛れて二人はそそくさとその場を後にした。

「はあ……今日は酷い目にあった」

「いいじゃないか。暇よりかよっぽど楽しめたぞ」

「お前は見てただけだからな。全く普通銃持ってる奴と戦わせるかね」

「この私が鍛えているんだからあれぐらいできて当然だ。喜べ、明日から無事修行のレベルが上がるぞ」

「おいおい、勘弁してくれよ……」

浩太には背に乗るエヴァの顔が見えない。

それでもいつものように面白そうに笑っているんだろうな、とため息が漏れるが、そんな浩太の顔にも、薄っすらと笑みが零れていた。

少年と学校

平日の学校の教室ではいくつかのグループが、和気藹々と学友と話に花を咲かせていた。

だが、教室の窓側の一番後ろの席にはそんな教室の明るい雰囲気とは真逆で、暗く沈んでいる。

その席の主は、浩太であった。

みんな一様に関わったら面倒だと思っているようで、誰も声をかけようとする者は誰もいない。

そんなことを思われているとは露知らず。というよりも、周りの状況を確認する余裕がない浩太は、机に突っ伏して死に体になっていた。

それもこれも、昨晩の修行で行われた瞬動マラソンが原因だ。

休むことなく一〇キロを十セットもする羽目になり、体力も気もすっからかんの状態が今朝になっても続いていた。その上、家を出る前にエヴァに血を吸われたことによって、貧血も重く圧し掛かっていた。

しかし、その修行によって瞬動術がだいぶ形になってきたということもあって、文句

を言おうにも言えない。
　きっと、今日もキツい修行を用意していることだろう。あくどい笑みを浮かべるエヴァが目に浮かんで、浩太は大きなため息を吐いたのだった。
「お前ら、席につけー。朝のホームルーム始めるぞー」
　教室に入ってきた教師の呼び声で、ぞろぞろと席に戻って行くクラスメイトたち。
　それを見届けた教師から諸連絡が報告されていく。
「それから、最近学校で飛び降りが多発している。だから、そういうやつを見かけたらすぐに助け出してくれ」
「それ、自殺を図ってるってことですか？」
　先生の報告に、委員長が質問を返す。先生はその質問に首を振ることで返した。
「いや、飛び降りた生徒たちの話を聞く限り自殺を図ったわけではなさそうだ。飛び降りた本人たちは『体が勝手に動いた』と、口を揃えて言っているらしい」
「えー！　それってつまりお化けとかだったりして⁉？」
　一人の生徒の声を皮切りに、ざわざわと教室中が騒ぎ出す。
「ヤバくない？」「てか、そんなことってあり得るのか？」「マジでお化けだったりしてな」
「やめてよ！　そういうの無理なんだから」
　だんだんとヒートアップしてきたところで、教師が教卓を叩くことで生徒たちを諌め

る。

一瞬で、ピタリと静かになる生徒たち。

「とにかく、そういったことが多発している。全員気をつけるように」

こうして朝のホームルームは終わりを迎えた。

教師が教室を出ていくと、すぐに先ほどの話題で持ちきりになっていた。さまざまな憶測が教室中に飛び交っていた。

それを傍観していた浩太は頬杖をついて、顔を外に向ける。

（飛び降り、ね……）

飛び降りの多発。

教師は簡単に言っていたが、一度ならまだしも、何度も起こるものだろうか？　仮にクラスが騒いでいるように幽霊の仕業だとして、何故今になって奇妙な事件が起きているのだろうか。この学校に通い、三年が経過するが今まで、そんな話は聞いたことがなかった。

考えても、答えは出ない。

だるいうえに、更に憂鬱な気分になった浩太は本日二度目のため息を吐く。

そんな浩太を嘲笑うように、窓の向こうには青空が広がっていた。

☆☆☆☆☆

午前中の授業は体力と気の回復に努めていたので、ほとんど寝て過ごした。何度か各担当の先生方に注意されたが、全て右から左に受け流していたので、正直何を言われたのか覚えていない。

昼休みになると、朝の友人グループが席をくっつけて弁当を広げていた。

浩太も友人から声をかけられたが、それに加わることはなくやんわりと断ると、弁当を持って屋上に移動する。

教室を出て、階段を軽快に駆け上がり屋上に出ると、回復した気で軽く身体強化を施して塔屋の上に飛び乗った。

ここは浩太が最近見つけたベストプレイス。

ここに登るための梯子は存在しないので、現状気の強化を使える浩太しか使用するものはいない。

壁に寄りかかって胡座をかくと、早速弁当を広げて黙々と咀嚼していく。今回は特に唐揚げの出来が最高だ。朝の朝食に出したら、エヴァからも好評だった。

ちなみに、この弁当は手作りだったりする。

エヴァが居候になる前までは購買のパンで昼は済ませていた。けれど、エヴァは料理ができないため、浩太が学校にいる間は昼食にありつけない。そのため、エヴァの昼食を作り置きすることになったので、ついでに弁当も作っているというわけだ。

最近になって、何故かエヴァが料理を教えてほしいと言い出したので教えているが、突然習いたいと思った理由は全くわからない。

一度だけ気になって理由を聞いたことがあるのだが、顔を赤くしたエヴァに襲い掛かられてしまったので、理由を聞くのは諦めた。

浩太としては、自分の負担が減るならそれでいい、と思っているので別段理由は気にしていない。

――もしそれをエヴァの前で言おうものなら、今までに経験したことのない地獄を、その身に受けることになるだろう。鈍感は罪なのだ。

ものの数分で弁当を空にすると、仰向けに寝転んで青空を眺める。心地良いそよ風が

髪を揺らして、頬を撫でた。

いくらかだるさと憂鬱な気分が晴れて、多少気が楽になっていく。

そこで、今朝の話題に頭を切り替える。

「今朝の話、なんか引っかかるんだよな……。自殺じゃないなら、度胸試しとか？　いや、今更高校生にもなってそんなことやらないか。幽霊、だとして何で今になって？　駄目だな、皆目見当がつかない」

うんうんと頭を悩ませる浩太だったが、結局答えは出ない。

しかし、それも仕方ないだろう。今回の事件はオカルト寄りで、その世界を知ったのもエヴァと過ごしたこの半年しか経っていない。

こういった非常識な事件はエヴァに出会うまで一度もなかったので、いざ考えるとなると何も浮かばない。どうにも腑に落ちない蟠りを晴らすべく、放課後になったら地道に調べてみることにしよう、と浩太は決めた。

――決してエヴァの修行から逃げるためではない。そう、決して。

心地よい風が吹き、ぽかぽかとした陽気に当てられて、大きな欠伸が漏れた。このままでは寝てしまい、午後の授業に遅れてしまいそうなので、弁当を片付けて屋上を出た。

教室までの廊下をぼうーっとして歩いて、ふいに外に目を向けた。すると普段人通りの少ない場所で、人ひとりを複数人が取り囲むようにして立っていた。
遠目から見ていると、時折手を振り下ろしたり、蹴りを入れているのが見えた。どうやら寄ってたかって、虐めを働いているようだ。
「はぁ……見て見ぬフリはできないよなぁ。ああ、もう！　本当に今日は最悪だ！」
浩太は顔をしかめて、吐き捨てるように叫ぶ。
そして、窓を開けると躊躇うことなく飛び降りた。
ここは三階。だんだんと加速して風が鬱陶しいが、その分すぐに地面に到達する。
着地する瞬間、全身を気で強化。
スタッと地面に降り立つと、そのまま目的の場所へと走り出した。

――浩太が虐めの現場を目撃する数分前。
「ほらほら、悔しかったら反撃してみろよ！」
「お前、いつも教室で人形ばっかり弄ってて気持ち悪いんだよ！」
「うっ、う……」

暴言を吐かれてなお、言い返すこともなく震えるように蹲る少年。少年の胸に抱えられているのは、壊れた人形。

人形は見るも無惨なほど、損傷が激しかった。おそらく、もう復元は不可能だろう。

惨めに蹲る少年を見て、高嗤いする集団。

その目には愉悦の色が見える。彼らは少年を見下ろしながら、痛めつけて楽しんでいた。

認めたくはないが、これが人間だ。

自分よりも劣っている人間(弱者)を貶めて、平気で傷つける。そして、優越感に浸って日頃の憂さを晴らすことで、自分は格上の存在なんだと証明する。そうすることでしか、自分を維持できないのだ。虐めを働くものたちは。

人間が集団として存在する限り、虐めが無くならないのも、当然と言えるだろう。

暴行を繰り返す中で、集団のひとりが虐められている少年と目が合った。

なんてことのない偶然。

しかし、少年と目が合った瞬間。言い知れぬ恐怖が背筋を冷やす感覚が走った。バッと、慌てて後ろに振り返るが、誰もいない。

何だよ？　と仲間に声をかけられて、なんとか平静を保つ。

彼が前に向き直ると、またもや目が合い少年の口が三日月のように弧を描いて笑って

いるようだった。薄気味悪くて、今度こそハッキリと恐怖を感じた。
彼はその恐怖を一刻も早く払拭するために、少年の顔面に拳を振り落そうとして、
「おい、お前ら。もうその辺にしとけよ。大人数でひとりを虐めるとか、かっこ悪いぜ」
振り落とされる瞬間に腕を掴みあげて、間一髪間に合った浩太が、そう言った。

浩太は面には出さないものの、振り落とされた拳を止められたことに安堵していた。すでに少年はボロボロで、これ以上暴行が続いていたら虐めの範疇を越えていただろう。
「離しやがれ！　テメェ、いきなり現れたと思ったら何しやがる。正義の味方気取りのつもりか？」
「そーそー、俺たちはこいつのことを思って教育してるだけなんだぜ？　止められるのは心外だなー」
「いやいや、どう見ても虐めだろ。寄ってたかって複数でひとりを虐めるとか、器ちっさ」
『ああっ⁉？』
ビキリっ、と音が聞こえそうなほど青筋が浮かべる虐めっ子たち。

そこまで激しく反応すると、器が小さいと認めているようなものだが、彼らは気付かない。

腕を掴まれていた男が、空いている方の腕で殴りかかってくる。

それが合図だったのか、他の男たちも浩太を排除するべく牙を向けた。

いくら一人でも複数人で襲いかかれば、一瞬で袋叩きにされるだろう。それには普通なら、という条件がつくが。

彼らは気の毒にも気で強化されたままの浩太に喧嘩を売ってしまったのだ。

――彼らの冥福を祈るばかりである。

一分後。

案の定、彼らは浩太に瞬殺されて地面に転がっていた。

返り討ちにして、すぐに虐められていた少年の方に目を向けるが、そこにはもう誰もいない。彼にも話を聞いておきたかったのだが、乱闘に乗じて逃げたようだった。よくあの身体で動けたな、と少し関心する。

そして、時間が経っていたようで、午後の授業の予鈴が鳴り響く。

遅れないようにと思っていたのだが、もう遅刻は確定だ。別に虐めを止めたことに後

悔はないのだが、虚しさが心を占めていた。
浩太は痛くなってきた頭を押さえて、空を仰ぎ見る。
「……最悪だ」
吐き捨てられたその言葉は、誰の耳にも届くことなく、空気に溶けて消えた。

☆☆☆☆☆

午後の授業を終えて、放課後。
虐めっ子たちを蹴散らした後、教室に戻ると背後に般若を携えた先生が立っていた。

午前中寝ていたこともあって、こっぴどく叱られてしまった。
完全に自業自得なので、ぐうの音も出ない。
もぬけの殻になった教室には、浩太ひとりしかいない。
何故誰もいない教室にひとり残っているかというと、先生から罰として教室掃除を言い渡されてしまったのだ。
友人たちに助けを求めたが、バイトや部活を理由に断られてしまい、絶望した。何人かはニヤニヤと笑っていたので、密かに私刑による復讐を誓う。
いくら何でもひとりで教室掃除はやり過ぎなような気もするが、この程度で許してもらえるのだから、ありがたいと思わなければならない。たった一回の掃除で許されるのなら安いものだ。
作業の三分の二程度が終わった頃、教室の扉が開かれた。顔を向けると、そこには担任の先生が立っていた。
「しっかりやってるか、佐藤」
「ちゃんとやってますよ。あともう少しで終わります」
「そうか。ちゃんとやっているようで何よりだ。終わったら真っ直ぐ家に帰るんだぞ」
「言われなくとも。先生はどうしたんですか？　俺の監視にでも来たんですか」
「それもあるが、今朝話した通り飛び降りがないか見回りのためにな。他にも見回りを

している先生方がいるから、俺はここに来たのさ」
なるほど、と浩太は呟いた。
浩太はエヴァのように認識阻害の魔法が使えない。先生ひとりなら動きやすかったのだが、複数人となるといささか動きづらくなる。
可能な限り気配を消して、慎重に行動するしかないだろう。
掃除をしながら、今後の予定を固めていく。
それから数分後。ようやく掃除を終えて、ちょうど道具を用具箱にしまった時だった。
『うわぁあああああ⁉　誰か助けてくれぇえええ！』
閑散とした校舎に、絶叫が轟く。
瞬時に意識を切り替える。そして、すぐに走り出す。
「先生！　俺先行きます」
「あ、待て佐藤！　勝手な行動を取るな！」
浩太は先生の制止を振り切って、声が聞こえた場所に全力で駆けていく。
これ以上、面倒ごとはごめんだ！　と、顔を険しくして。

☆☆☆☆☆

彼――浩太に腕をつかまれた男――は放課後になっても、まだ校舎を出ていなかった。否、出られなかった。

虐めっ子でも人間。未知は怖いもの。

多発しているという飛び降りの奇妙な事件に加え、昼間のアイツの不気味な笑みが脳裏に張り付いていて、気分が悪い。

だからこそ、早急に帰りたかった。

けれど、帰ろうとしても体が全く言うことを聞かないのだ。意識はハッキリしているし、思考もできるというのに。

教室を出てから身体が自分の意志に反して勝手に動き出し、人気のない教室へ来ると、そのまま椅子に腰を下ろした。座ったまま動かせる部位を確認したが、口しか動かすことができずに、かなりの時間が経ってしまった。

すでにほとんどの生徒が下校したようで、校舎の中は静謐そのもの。時折、足音が聞

こえてくるが彼のいる教室までやってくる気配はない。

夢を見ているのではないか、とも思った。
しかし、クラスメイトが帰り際に軽く肩を叩いていったことを思い出す。
あの時の感触と軽い痛みは本物だった。だから、夢でもない。
やがて、彼は一つの考えに至ってしまう。
これではまるで、まるで人形になってしまったようだ。

そう考えて、再び脳裏に昼休みの光景がフラッシュバックする。
壊れた人形を抱えて、こちらを見上げる口元を三日月形に歪めたあの顔を。
思わず、ひっと、小さな悲鳴が漏れる。
冷や汗が止まらない。
時間が経つにつれて、呼吸がどんどん荒くなっていく。
恐怖に身体が震えて、心臓が早鐘を打つ。
頭にけたたましく響く警鐘が鳴り止まず、嫌な予感が止まらない。

そして、その予感が当たった。当たってしまった。

今まで言うことを聞かなかった体が嘘のように、ゆっくりと動き出した。
もちろん、彼の意思通りに動いているわけではない。

彼は席から立ち上がり、ゆっくりとした足取りで教室から出るとそのまま廊下を歩いていく。
勝手に動く身体のその行き先に思い至り、彼の顔が青を通り越して白く染まった。
この先を行けば、三階への階段がある。
「おいおい、嘘だろ……」
彼から悲痛な声が漏れる。けれど、足は止まらない。
階段が、見えてきた。

「嫌だ、頼む誰か！　誰か助けて！」

彼は助けを求める。けれど、誰も助けにこない。
ゆっくりと、階段を登っていく。

「うわぁあああああ⁉　誰か助けてくれぇぇぇぇぇ！」

彼はついに恥も外聞も捨てて絶叫した。
三階にたどり着くと、突き当たりを右に曲がっていく。
そのまま直進していくと、奥に窓が見えてきた。何故か窓が開いている。
あれが、終着点だ。

「嫌だ！　嫌だ！　死にたくない⁉　お願いだ！　助けてくれぇえ！」

窓にたどり着く。
手を置いて、そこから身を乗り出していく。
地面が見えた。三階なだけあって、とても高い。ここから落ちてしまったら、きっと大怪我ではすまないと直感した。

そして、ついに彼の体が窓から離れて――

「間に、あっ、たぁあああ！」

落ちるはずだった彼の襟首を掴んだのは浩太だった。
強化された腕力は軽々と人ひとりを持ち上げて、なんとか落ちる前に救出することができた。
ここまで来るのに一直線だったので、瞬動で一気に距離を詰めることができたのが幸いしたようだ。
彼は九死に一生を得て安心したのか、気絶していた。浩太も座り込むと、盛大に疲労のため息を吐く。
しかし、それも一瞬。浩太は目を鋭くして後ろに振り返った。当然そこには人はいない。
「こんなふざけた真似しやがって……。悪いが、この事件。個人的に俺がぶっ飛ばさないと気が済まなそうだ」
その瞳に怒りを宿して、浩太は無表情に、そう言った。

吸血鬼と人形使い

現在、浩太は正座をしていた。

目の前には無表情なエヴァが腕を組み、仁王立ちで立っている。

冷たい瞳が浩太を貫く。浩太は恐怖に体を縮ませているので、自然とエヴァが見下ろす形になった。

帰ってきて、家の扉を開くと、玄関にただならぬ迫力を醸し出すエヴァが待ち構えていたのだ。心当たりがあった浩太は頭を抱えて、せめてこれ以上エヴァの機嫌を悪くはしまい、と両手をあげて降伏した。

「それで？　何故早く帰ってこなかった。今日のお前には特に予定はなかったはずだが」

いつもの声音でもなければ、怒っている声音でもない。ただただ冷たい声で、問いただしてくる。

だらだらと冷や汗が噴き上がる。ポタリと、床に汗が一粒落ちた。

「えっと、そのですね。実は――」

「言い訳は聞きたくない」
ピシャリと、エヴァが浩太の台詞を遮った。
（理由を聞いたのはお前だろ！）
当然、そんなことを言えるはずもなく胸中で叫ぶだけに留まった。
言ったら、最後。再びエヴァに嬲られる結末が目に見えているからだ。
どうしたものか、と顔を俯かせて鈍い頭を急回転させる。
しかし、それも長くは続かなかった。
いつの間にか目と鼻の先にまで移動したエヴァが、浩太の顔を両手で掴んで無理矢理自分と目を合わせる。
そして、浩太は息を呑んだ。
何故なら、エヴァが泣いていたからだ。
ズキリ、と胸に刃物を刺されたような痛みが走る。
いつも堂々としていて、プライドの高い彼女が泣いたところを見るのは、これが初めてだった。
ポロポロと涙を零す蒼い瞳。
頬を赤くして嗚咽を漏らすその姿は、まさに少女そのもの。
場違いなことと理解しているが、浩太は思わず目を奪われてしまった。

しかし、それも一瞬。
すぐに頭を切り換えて、エヴァを抱きしめる。
何故か、そうしなければならない気がしたから。
「泣くなよ。お前が泣いたら、調子狂う……」
「グスッ……だって、浩太が約束すっぽかしたから。修行を辛くしすぎて、嫌われたのかと思って……それで、どうしたらいいか、わからなくて」
「――ああ、もう！　全部俺が悪かった！　別にエヴァのことが嫌いになったわけじゃない。ちゃんと理由があるんだよ」
「……ほんとう？」
「本当だ」
「よかったぁ……」
涙目のエヴァが上目遣いで見つめる。
それは浩太の顔を一瞬で赤くさせるほどの破壊力を有していた。
もし、ロリコンが見ていたらそれだけで昇天してしまうだろう。
エヴァの頭を撫でる。彼女の髪は生糸のように触り心地が良い。ギュッ、と背中に腕が回される。
浩太はエヴァが落ち着くまで、抱きしめたまま頭を撫で続けた。

二十分ほどして、エヴァが泣き止んだ。

冷静になったことで羞恥心が込み上げてきたのか、すぐさま浩太を突き飛ばす。

そして、口をパクパクと開閉させて、何かを言おうとするのだが上手く言葉にならない。

結局この後浩太は、いろいろと限界を迎えたエヴァに一方的に殴られてしまうのだった。

☆☆☆☆☆

「――というわけなんだよ」
「ふんっ、くだらないな。わざわざお前が何かするまでもないと思うが?」
「まあまあ、そう言うなって。これは俺が個人的に終わらせたいんだよ」
「……勝手にしろ。ただし私も関わるからな」
「それはもちろん。頼りにしてるぜエヴァ」
「当たり前だ。この私がいるんだ、すぐに終わらせてやる」
　エヴァに事情を説明すると、この件を終わらせることに手を貸してくれることになった。元々手を貸してもらうつもりだったので都合が良い。
「それでこの件に何か思い当たることないか?」
「――と、言ってもな。この世界にはそもそも魔法などが存在しないんだよ。魔力は人それぞれ生れながら宿しているようだが、それだけだ。あとはたまに有名どころの武術家が気を使っているのがちらほらいるぐらいだな」
「そうなんだよな。俺だってエヴァに出会わなかったら、魔法とか気に関わることなんてなかったし」
「それが普通だ。私の世界だって、一般人はいる。お前のように魔法を知って、関わりを持つ方が稀なんだよ」
　エヴァの言う通り、この世界には魔法が存在しない。

魔力や魔法を使う際に力を貸してもらう精霊たちも存在しておらず、エヴァでさえ、魔力があっても実際に魔法を使うことができない。

――と、いうのがこの世界だ。

気に関しても武闘家やアスリート、有名な武術道場の師範が触り程度に使えるレベル。普通の人よりも、少々常識はずれなことができるぐらいだ。

よくテレビで見て、すげーと思う。これぐらいの認識で良いはずだ。

浩太も例に漏れず、エヴァと出会うまでは魔法や気のことなど知らないで生きてきた。そして、エヴァに魔法や気について教えを受けて、ようやく使えている。

ちなみに浩太は魔力や気の量が、エヴァの世界の関係者たちよりも多いらしい。例をあげるなら、サウザンドマスタークラス。これほどの逸材はそうそういないとはエヴァの談。

つまり、浩太も結構なチート持ちだったのだ。――持っていても使えなければ、宝の持ち腐れになるだけなのだが。

浩太自身あまりすごいという実感がないし、その所為で毎日エヴァに血を吸われる羽目になっているので、素直に喜べない。むしろ落胆した。

しかも浩太の血を吸って得た魔力をたびたび起こす癇癪で使用しているため、一向に魔力が回復しない。

「でもさ、今回の件は絶対に魔法絡みだよな？　そうじゃないとあり得ないぞ、こんなこと。実際俺が助けたやつも自分から落ちようとしたわけじゃなさそうだ。泣きわめいて、助けたあと恐怖で気絶したし」
「確かに怪しくはある。しかしこの世界に魔法が使えるのは現状私と浩太だけだ。だから、魔法とは言いづらい。まだ幽霊が出たという方が信憑性はあるな」
「そうだよなぁ。でも、うちの学校には昔誰かが自殺したとかはないんだよな。それにさ、助けた時に近くに人の気配がしたんだよ」
二人で頭を抱えて、うんうんと唸る。
心当たりもないに等しいこの状況。わかってはいたが序盤から手詰まりになってしまった。
まさか犯人を突き止めるために、また次の被害者が出るのを待つわけにもいかない。
すでに犯人は浩太が被害者の救出したことはわかっているはずだ。だとしたらしばらくなりを潜めて、機会を伺うことに徹するだろう。
あの時すぐに追いかけようとしたのだが、確かにあったはずの人の気配が忽然と消えた。それこそまさに幽霊のように。
辺りも捜索したが犯人と思しき人物は見つからなかった。

考えれば考えるほど、謎が謎を呼んでしまう。
浩太はなかなか考えが浮かばずに、乱暴に頭を掻きむしった。見れば、エヴァも苛立ったように爪を噛んでいる。
それも、睨まれた相手が恐怖で死んでしまうのではないか、と思わされるほど強烈に。
何が彼女をそこまでさせるのかわからなかったが、そのおかげで浩太は一度考えをリセットして冷静になる。

今回の事件は一体何だ？
生徒による飛び降り。しかしそこに本人たちの意思はなく、全て体が勝手に動いている。
犯人はいるのか？
先に救出した際に、確かに人の気配があった。けれど、すぐに消えてしまった。
あれは先生やたまたま居合わせた生徒ではなかった。該当するものなら気配を消す必要がないからだ。犯人がいる、と断定することはできない。
その手段は？
これも現状不明。
一番可能性があるのはエヴァが言った幽霊。

幽霊がいることを否定するわけではないが、魔法を知った弊害か魔法が絡んでいるのではないかと考えてしまう。

そもそもその魔法だって、エヴァと出会わなければ――

ピタリと思考が止まる。今のフレーズが脳内で反芻されていく。

そして、あるひとつの可能性に思い至り、立ち上がった。

ビクッ、と突然立ち上がった浩太に驚いたエヴァの肩が跳ねる。

「……そうだ。そうだよ！　それなら今回の事件を起こせるかもしれない！」

「おい、いきなり立ち上がるんじゃない！　びっくりしただろうが。――それで？　何かわかったのか」

浩太はコクリと首肯した。

わけがわからないエヴァは訝しげに見つめてくる。

そんなエヴァに向かって浩太は、

「――なあ、エヴァ。お前がこっちの世界に来た時の話、もう一回聞かせてくれないか」

☆☆☆☆☆

翌日。

今回の事件を終わらせるべく学校に登校した浩太は、校門前で呆然と立ち尽くしていた。

「兄貴！　おはようございます！　昨日は助けていただき、ありがとうございました！」

何故なら、昨日助けた男が待ち構えていたからだ。

元々この男とは今日会って話をするつもりだった。それが校門前にいたのだから好都合、なのだが……。

浩太は顔を引き攣らせて、

「あの、なんで兄貴？」

「いやそれはもう！　あんなに必死になって助けていただいて、俺感動したッス！　あ

なたこそ男の中の男！　俺はそんなあんたに報たい。今までの悪事から足洗って、これからは兄貴について行きます！」

「ああ、そう。……最悪だ」

周囲の視線が浩太たちに集中している。ひそひそと何かを囁いている奴もちらほらと伺えた。

しばらくは事実無根な噂が続くだろう。その度に心労がたまると思うと学校に来るのが億劫になりそうだ。

浩太はこれからのことを思い浮かべて、今から痛む頭を押さえた。

「取り敢えず、今は自分の教室に行け。それで昼休みに話をしよう。オーケー？」

「わっかりました！　チャイムとともに迎えに行くので待っててくださいね！」

「いや、最後まで受けてから来い――って、もういないし」

彼は一度敬礼すると、浩太の声を聞くことなく走り去ってしまった。

大きなため息を吐く。

何だか最近は朝から憂鬱になることが多い気がする。

……癒やしが欲しい。

浩太は切実に、そう思った。

四時間目は現代文。

浩太の数少ない趣味のひとつが読書のため、現代文は唯一寝ずに受ける授業だった。

チラリと周囲を見回すと、周りのクラスメイトは夢の世界に旅立った者や舟を漕いでいる者が多くいた。

担当の先生は初老で心優しいため、そんな光景を見ても咎めることなく授業を進めている。ふいに時計を確認すると、あと一分ほどでチャイムがなる時間まで差し迫っていた。

今朝彼が言っていたことが本当なら、そろそろやってくる頃合いだ。

そして、案の定チャイムが鳴ったと同時にバタンと大きな音を立てて戸が開かれた。

「兄貴！　迎えにき、マダバァ!?？」

彼の顔を確認して、瞬動。

無言で彼の顔面を蹴り飛ばすと、戸を閉めてまた瞬動。誰にも気付かれることなく、うるさいやつを排除して席に戻った。
クラスのみんなが振り返った時には全てが終わっていたため、みんなが不思議そうに首を傾げていた。
それをどこ吹く風と気にすることなく、浩太はため息を吐いた。

場所は移り、屋上。
「ってて、いきなりヒドイッスよ兄貴。何も蹴ることないじゃないですか」
「うるさい、足洗ったなら最後まで授業を受けろバカ。それと俺のことを兄貴と呼ぶんじゃない」
鼻の両方にティッシュを突っ込んだ彼――佐伯雅敏――は、涙ぐみながら顔を擦っていた。
浩太はそんな彼に目もくれずに、口へと弁当をかき込んでいく。
涙ぐむ男とそれを無視する男。
傍からすれば浩太が泣かせているようにも見える。
しかし、浩太は仮に人が見ていても気にしない。何故なら、これ以上浩太の評価が下

がることはないからだ。
今朝の出来事に尾ひれがついて回り、浩太は不良の頭だという根も葉もない噂が流れている。その所為で周りが浩太から一歩引く、という状況が出来上がっていた。
だから、恨みも込めて雅敏の顔面を蹴り飛ばした浩太は悪くない、はずだ。
食べ終えた浩太は弁当を置くと、真剣な顔つきに変わって雅敏に問いかける。
「それで、お前が虐めてたやつのことなんだが」
「はい、括繰(くくり)のことですよね。あいつは三組にいて、フルネームは括繰宗司。いつも教室で人形ばっかりいじってて、みんな気味悪がってました。それで俺のグループが目をつけて、その、虐めてました」
「なるほどな。……わかってると思うが、もう」
「……はい。もう絶対にやりません」
虫が良すぎますよね、と乾いた笑いを漏らして雅敏は俯いている。
ようやく自分の過ちを理解して、罪悪感に苛まれているようだった。
「落ち込んでいるとこ悪いが、もう一つ聞く。今まで飛び降りした奴らは全員お前の仲間だな?」
「え、あ、はいそうです。でも、何でわかったんですか?」
「まあ、ちょっとな。……これで全部繋がった」

浩太の中で可能性だったものが、確信へと変わった。
この事件は今日で終わらせる。
「ありがとな、おかげで助かったよ。それと今日は学校が終わったらすぐに帰れ。いいか？」
「わ、わかりました」
「なら良し。――それと月並みしか言えないが、周りが何か言うのは当たり前。言われるだけのことはしたんだからな。悪いことをしたならその分良いことをしろ。だから、これからお前がどうしていくかってのが大事になる」
「……兄貴」
「まあ、それだけだ。じゃあな」
後ろから、ありがとうございます、と囁く声が聞こえた。
恥ずかしいことを言ってしまった浩太は、振り返ることなく屋上を後にした。

☆☆☆☆☆

午後の授業をつつがなく終えて、放課後に突入した。
雅敏たちのグループが無事に帰ったことを確認すると、浩太は先生たちに気取られないように屋上へと歩を進めた。
屋上にはすでに待たせている人間がひとりいる。
そいつが今回の事件の犯人だ。
階段を登り、屋上の扉を開けると、
「えっと、佐藤くん。ぼくに用があるって何かな?」
雅敏たちから虐めを受けていた括繰宗司が、そこにいた。
「声をかけられた時はビックリしたよ。今まで関わりなんてまるでなかったから。ああ、昨日のことかな? ごめんね、怖かったからあいつらが君に向かった時に逃げちゃったんだ。そのことなら謝るよ」
「いや、別に気にしてないさ。今日はそれとは別件でな、たいしたことじゃないからすぐに終わるさ。お前に、ひとつ聞きたいことがあるんだ」

「何かな？」
困ったように笑う括繰。
しかし、浩太の次の言葉に顔を強張らせることになった。
「――人の自由を奪って落とすっていうのは、どんな気分だ？」
「何を、言ってるのかな？」
強張らせたのは一瞬。
すぐにまた困った顔に戻る。
けれど、纏う雰囲気が鋭くなったように感じられた。
「昨日、お前はあいつらに虐められていた。その放課後に虐めていたひとりが飛び降りそうになったところを俺が助けたわけだ。そして、今まで飛び降りをしてきたやつらは全員、あるひとりの人間を虐めていた」
「それが僕だと？」
「その通り。偶然にしては出来すぎてる話だからな、すぐにお前が犯人候補にあがったよ」
「でも、それだけだったらぼくが犯人とは言えないんじゃないかな」
括繰の言う通り、これだけでは証拠としては弱い。
浩太には犯人の目星とその手段を考えるまでが限界。

だったら、もっと強い証拠を括繰から奪い取る。多少強引になるが、それが確実だ。
気で身体を強化していく。
膝を折り曲げて、力を込めて床を蹴った。
括繰は突然の突風に顔を腕で覆い隠す。突風が止み、彼が腕を退けると前にいたはずの浩太がいなかった。
それもそのはず。普通の人間が視認できない速度の瞬動で彼の横を駆け抜けたから。
「これなーんだ？」
「ッ⁉　いつの間に後ろに⁉　それに、それはぼくの！」
浩太の手には、人形劇をする際に使用する操作板が握られていた。
慌てて括繰は自分の懐を確認するが、探しているものが見つかるはずがない。
浩太の手に握られたものは、確かに括繰の懐から拝借したのだから。
操作板を見ると、わずかにだが魔力の残滓が確認できる。
これで昨日の仮説が証明された。
仮説というのは、昨日エヴァに質問したことが関係している。

時は遡ること、昨日。

「――なあ、エヴァ。お前がこっちの世界に来た時の話、もう一回聞かせてくれないか」
「私が？　別に構わんが、内容は変わらんぞ」
「おう。確認したいことがあるさ。頼むよ」
　まだ納得いかない様子のエヴァだったが、思い出しながら当時のことを語り出す。
「前にも話したが、私が麻帆良学園の警備をしている際に侵入してきたやつが攻撃してきたから返り討ちにしてやったんだ。倒しはしたんだが、最後の抵抗にやつは自身の魔道具、それも時空間系のものを暴走させた。油断していた私は開いた穴に吸い込まれて、お前に助けられたんだ」
「ああ、そうだよな」
「それで？　これが今回の事件とどう繋がるんだ」
　エヴァは怪訝そうに浩太を見つめる。
　彼女の疑問に答えるために、浩太は口を開いた。
「エヴァ。お前が倒したそいつは、他にも魔道具を持ってたか？」
「ん？　持っていたと思うぞ。やつは向こうの世界では多少名の知れたコレクターで魔道具や曰く付きの品を遺跡から盗掘、持ち主を殺して強奪を繰り返していたからな。あの時も麻帆良の魔道書を狙ってやってきたはずだが――ああ、そういうことか」
「ああ、たぶんその線が強いぜ」

エヴァも浩太と同じ結論へとたどり着いたようだ。
ここまで言えば、もうわかるだろう。
「エヴァが吸い込まれたこの世界へと続く穴。おそらくその時にそいつが所持してた魔道具のいくつかがこっちに流れ着いてきたんだ」
「確かにそれなら今回の事件も起こせるだろう。魔道具と言っても、相性にもよるが魔力さえあれば素人でも扱えるからな」
「そうなると犯人候補は虐められてたやつかな。駆けつけた先生に少し話を聞いたら、虐めっ子たちばかり落ちてるって話だったし」
それならば辻褄があう。
虐められた奴は散々な目に合い、恨みがある。偶然拾った魔道具を使って復讐を考えてもおかしくない。
恨みがあるとはいえ、やっていい理由にはなり得ないが。
「しかし犯人に目星をつけたはいいが、どうやって証明するつもりだ？　この理由では弱いぞ」
「うっ、そこは、まあ多少強引にいくしかないといいますか」
「はぁ、お前は肝心なところが抜けているな。それだと足をすくわれるぞ」
「……面目ないです」

しゅん、と肩を落として浩太は項垂れた。
やれやれとエヴァはため息を漏らすが、その顔は落ち込んだ子供を見守る母親のように微笑んでいた。
最後にエヴァは、もしもの時は私が何とかしてやるさ、と言っていたが一体何をするつもりなのだろうか。謎である。

昨日の回想にふけりながら、浩太は苦笑した。
結局最後は強引な手を使ってしまったが、これで謎は解けたことになる。
あとは括繰をぶん殴って、それで終わりだ。
改めて括繰に目を向ける。
彼は驚いていていたものの、今は怪しい光を瞳に宿しながら笑っていた。
浩太が怪訝そうに口を開こうとすると、
「くくっ、なるほど。君もそれと同じものを持ってるんだね？　それなら確かにぼくが犯人と考えても不思議じゃない。まさか学校に同じ人間がいるとは思わなかったよ。ははははは！」

「……何がおかしい」
「だって、君がもう勝った気でいるのがおかしくてさ」
「何だと?」
目の前の括繰がクイッと指を引いた。
警戒を一段階上げたが、一足遅かった。
指の動きに反応して、浩太の手から操作板がひとりでに飛び出し、彼の手に収まってしまったのだ。
拙い、と浩太が顔を顰めると、括繰は満足したように不気味な笑顔を浮かべている。
取り返そうと動こうとしたが、すでに彼は操作板を動かしていた。操作板へと魔力が流れるのが確認でき、鈍色の光が宿る。
何をするのかわからない以上、下手に動くことができない。
奥歯を強く噛み締めながら、彼の動きを注視していると、ふいに屋上の扉が大きな音を立てて開け放たれた。
「げっ、マジかよ」
思わず、愚痴が漏れる。
開け放たれた扉からぞろぞろとやってきたのは、まだ残っていた生徒と見回りを行なっていた先生たちの姿があった。

皆一様に瞳に光はなく、のろのろと歩く様はゾンビを彷彿とさせる。
「ぼくが操れるのは何もひとりだけじゃない。こうやって大勢の人間を一度に操ることもできるのさ！　君にも何か力があるみたいだけど、非情な人間じゃない。そんな君が彼らを攻撃できるのかな？」
「……最悪だ。ほんと、いい性格してやがるよお前」
括繰はより一層笑みを深くして、面白そうに哄笑した。
別に手を出さないわけではない。
浩太自身、相手を最小限で無力化する術を持っている。
けれど、あの中には女性もちらほらと紛れていた。男性はともかくとして、女性に手をあげることに少くなからず抵抗があった。
もしこの場にエヴァがいたなら、甘さを捨てろと叱咤されることだろう。
「そういえば、人を落とす気分を聞いてたっけ？　せっかくだし教えてあげるよ。あれは最高、いやぼくにとっては至高だね！」
括操は恍惚した表情で叫ぶ。
「そこにいる人形（人たち）みたいに意識を奪えるんだけど、あえて意識と口の自由だけを奪わないんだ。するとどうだい？　馬鹿みたいに泣き叫ぶんだよあいつら！　それがおかしかっておかしくって」

浩太の顔から表情が消えた。
瞳に宿っていた光も、徐々に消え失せていく。
「本当に落ちていく様を見るのは、いつも楽しくて仕方がないよ。あいつらの復讐が終わったら、次は誰を人形にしようかな？　何もしない癖小言ばかり言ってくるうざったい大人たちもいいね。一体どんな風にぼくを笑わせてくれるのかな」
汚らしい笑い声が屋上を支配する。
浩太にはもう括繰の声は届いておらず、彼を通して見える何かを見ていた。
それは幼き日の浩太の記憶。
彼の言動に、心の奥底にしまい込んだ記憶（モノ）が急速に浮上し、記憶の一部が浩太の瞳の先に再生される。

――浩太の視線の先には、血溜まりに沈む〇〇だったものが転がっていた。

転瞬。浩太から気が噴き上がる。
プレッシャーが括繰を襲う。
ビリビリと大気が震え、肌を刺す気迫にたじろいだ。
浩太は貫手を構える。

浩太には括繰が見えておらず、目の前に立っているのは人間ではなく、単なるクズとして認識していた。

クズは、片付けないといけない。

「何で、お前みたいに人の命を玩具みたいに扱う奴が、生きてるんだろうな……」

一突きで敵の心臓を潰さんと、足に気を回して爆発させる。

このまま行けば、確実に殺せる。引き絞った貫手が括繰の心臓を突き穿つ――はずだった。

浩太の突きは、割り込んできた者に手を掴まれたことで、阻止された。

「やれやれ。様子を見ていたが思っていた通り、下衆な人間の仕業だったな。こいつを殺そうとする気持ちはわからんでもないが、止めておけ。お前は手を汚すべきではないよ、浩太」

「……エヴァ？　何で、お前がゴボニィ!?」

聞き慣れた彼女の声が聞こえ、正気を取り戻した浩太の手を掴んでいたのは、ここにいないはずのエヴァだった。

足元の影が揺らいでいるのが確認できる。どうやら影の転移でここまで飛んできたようだ。

我に返った浩太が声をかけたが、それは最後まで続くことはなく。容赦ない彼女の蹴

りが側頭部を捉え、蹴り飛ばされてしまった。
一体その幼児体型のどこにそんな力があるのか、小一時間ほど話し合いたい。
「ッたいな⁉　いきなり何しやがる！」
「お前は明らかに正気を失っていたぞ？　それを止めてやったんだ。甘んじて受けろ」
「……それに関しては、マジで助かった」
ふんっ、とエヴァは振り返り、浩太が人殺しに走るきっかけを作った男を睨む。
睨まれた本人は突然現れた少女に目を白黒させていたが、落ち着きを取り戻していくと、今度は厭らしい目で舐め回すように彼女の肢体を見ていた。
エヴァは黒のワンピース一枚というシンプルな格好。
一応マントを羽織ってはいるが、陶器のように白く伸びた手足を強調するだけで意味がなかった。
十人が見れば十人が振り返るほどに、彼女の姿は美しかった。
浩太は見慣れているせいか、あまり反応しなかったが。
「どこから出てきたのか知らないけど、まるで人形みたいな子だ。よし決めた。君をぼくの人形にしよう。そしたら毎日可愛がってあげるからね」
「お断りだ。浩太、女どもは私がやってやるから。お前は男どもを何とかしろ」
「わかった、任せてくれ」

括繰の言葉を無視して、二人は集団へと突貫する。
エヴァは魔法を使うまでもなく、女性たちの首に手刀を落として意識を奪う。
おお、と浩太は感嘆の声を漏らす。
エヴァは伊達に六百年生きているわけではない。魔法だけでなく体術に関しても超一流の達人なのだ。
「悪いけど、眠っててくれ」
浩太は男たちに接近すると、軽く顎を撫でた。
それだけの行為で、彼らはバタバタと倒れていく。
触れた瞬間に小さく気を放出。その衝撃が脳を揺らし、気絶させる。
ものの数十秒ほどで、操られていた彼らの無力化を完了した。
括繰の顔から余裕の色が消える。
ここまで呆気なく終わるとは思っていなかったのだろうか。
「そんな、こんな簡単に……ぼくの人形たちがやられるなんて」
「意思のないものなど、容易に対処できるさ」
「……クソがっ、だったら君を人形にして！」
怒りを露わにした括繰は操作板から魔力糸を伸ばすと、エヴァに向けて射出した。
エヴァを操ることができれば、即戦力としては申し分ない。できればの話だが。

避けることなく受けたエヴァの体に魔力糸が巻きついていく。
ニヤリと笑みを浮かべた括繰は操作板を動かす。エヴァを操り、浩太を倒す腹づもりらしい。
けれど、彼の意に反してエヴァが動くことはなかった。
彼は酷く狼狽した様子で、操作板を忙しなく動かすが一向に変化はない。
「な、何で⁉　確かに糸は巻きつけたはずなのに！」
「ハッ！　この程度の力で私を操ろうとは片腹痛い。貴様がいくらやったとしてもこの私を操るなど不可能だ」
「……うそだ、うそだうそだうそだ！　ぼくは力を手に入れて強くなったんだ！　この力で虐めてきた奴らに復讐してきたんだ！　ぼくに操れないものなんてないんだよ‼？」
現実を受け入れられない括繰は、壊れたように叫び出す。
浩太は、彼に哀愁を帯びた目を向けていた。
「かわいそうな奴だな」
「……何だって？　ぼくが、かわいそう？　一体何を言ってるんだ」
「お前はその力を手に入れて、虐めてきた奴らに復讐しているわけだが。結局、後ろに隠れて自分では何もできない臆病者だからだよ」

「……黙れ」
「お前は虐められている時、現状を変えようと何かしたか？　虐めが酷くなるのが怖くて何もしなかったんじゃないか？」
「黙れって言ってるだろォ‼？」
激昂した括繰が先より倍の魔力糸を伸ばす。
今度は浩太に向けて魔力糸を射出するが、魔力糸は浩太には届くことなく空を切る。
「遅えよ」
引き絞られた拳が弾丸さながらの威力で振り抜かれ、見事に括繰の顎を打ち抜いた。
あまりの衝撃に彼は吹き飛んでしまう。
床をニ、三度跳ねたところで彼の体はようやく止まった。
「終わったな。さて、あとは魔道具の回収とあいつの記憶を消して終わりだ。――と、言うわけで浩太。血を吸わせろ」
「……朝も吸っただろ」
「影のゲートを使ったからもう魔力がないんだよ。ええい！　さっさと吸わせろ」
「そうだった畜生⁉　あ、ちょっと待っ――アァアァアァ！」

後日談になるのだが。
あの後記憶を消された括繰は虐めも無くなり、今では普通の生活を送っている。
虐めっ子たちは雅敏が声をかけたようで、彼に手を出すようなことはなくなったそうだ。
雅敏も最初は陰口を叩かれていたが、徐々にではあるが周囲の人間から認められつつあった。
こうして、今回の事件は終結した。
しかし、散らばった魔道具がひとつだけとは限らないので、今後は魔道具の回収も検討しなければならない。
そして、浩太自身も決着をつけなければならない問題を抱えている。
問題は山積みだ。
けれど一先ずは戻ってきた平穏な日々を謳歌しよう。
最近は雅敏が付いて回って鬱陶しいが、そんな毎日が悪くないと、浩太は思った。

少年と仮契約

あの事件から一ヶ月の月日が流れた。
あれから浩太とエヴァは休日を利用して、魔道具の回収を行っている。
もちろん、ただの捜索ではない。
捜索する時の移動手段は、常に浩太がエヴァを背負って瞬動で向かう。人通りのある道を瞬動で駆け抜けると騒ぎになってしまうので、その場合は虚空瞬動で上空を移動する。万全を期して、エヴァが認識阻害の魔法をかけているので見つかる心配もない。
この一ヶ月の間に行われた地獄のような修行で虚空瞬動を身につけたわけだが、もう二度とあんな修行はしたくない、と浩太は心に誓った。
浩太は捜索で少しは修行をサボれると期待していたが、あっさりと希望を砕かれてしまった。その時にエヴァが浮かべていたとてもイイ笑顔は記憶に新しい。
こんな時にも修行させることを忘れないエヴァさん、マジパネエッス。
この一ヶ月のうちに回収した魔道具は十三個。
魔道具の捜索は困難を極める、と思っていたのだが、思いの外回収が捗っている。
魔道具は魔力に惹かれる性質があるようで、曰く付きの場所や骨董店に紛れているこ

とが多く、そこを中心に探し回った。
何故、骨董店も探すのか疑問に思ったが、長年使われてきた物たちにも魔力が宿る。日本でいう付喪神みたいなものだ、とエヴァが言っていた。
今日も二人は四度目になる捜索を行っていた。――手がかりがあるわけではないので、当てもなくぶらついている、とも言うが。
流れついた魔道具の詳しい数はわからない。麻帆良の侵入者の魔道具の一部、もしくは全てこっちの世界に流れていると考えると頭が痛くなる。
すでにこの街にある曰く付きの場所や骨董店は回ったので、もうすでに目ぼしい場所が残っていなかった。
けれど、探さないわけにもいかず、街に繰り出しているのが現状だ。
もうひとつ、考えられるのは括繰のように魔道具を拾い、所持している者。
所持しているかを見分ける方法はある。それは、魔力の流れを見ることだ。
所持していると、魔道具に刺激された魔力が励起状態に変化する。
本来なら魔力を扱う術がない人間は魔力が眠っていて、流れがない。それが基底状態。ほとんどの人間がこの状態で、励起状態にあるのは魔法関係者ということになる。
しかし、魔道具が魔力を欲して眠っている魔力を刺激し、呼び起こしているのだ。
浩太も、この間の括操のように魔道具が使用されれば魔力の流れを見ることができ。

しかし、魔道具を介さない魔力に関しては、まだまだ見分けることが出来ず戦力外。
そのため、ここは六百年のキャリアを持つベテラン魔法使いであるエヴァに頼る他ない。
その所為か、最近エヴァは何か頼む度に血を吸ってくる。朝に一度吸われている浩太からすれば、とても辛いものだった。
何故、そこまで血を吸うことに拘るのだろう。
魔力を回復させること以外に理由があるのではないか、と浩太が勘ぐるのも仕方ない。その理由には皆目見当がつかないようだが。
全ては、エヴァのみぞ知るところである。
エヴァを背負いながら、浩太は深くため息を吐いた。
頭の後ろで、今のため息に対して思うところがあるのか、軽い頭突きをしてくるエヴァ。だが、全く痛くない。むしろ、微笑ましいまである。
振り返ることなく頭突くエヴァを想像して、笑いが溢れた。
そうしていると、エヴァが耳元に寄って小さな声で囁いた。
「おい、浩太」
「どうしたんだよ？」
「ゆっくり後ろを見てみろ」

言われるがまま後ろを確認するため、僅かに振り返る。すると、視界の端に全身コートの如何にも怪しい大男が映った。
「気のせいかと思ったが、あの男。私たちを一定の間隔でつけてきているな」
「つける？　何のためにそんなことするんだよ」
「奴から魔力の流れを感じる。――魔道具持ちだな。恐らく偶然奴の標的にでもなったのだろうな」
魔道具持ちと聞き、浩太は意識を切り替えた。
ここでは人通りもあり人を巻き込んでしまうため、角をいくつか曲がっていき人通りのない場所へと移動。この先に、滅多に人が訪れない空き地がある。
説得するにせよ、実力行使するにせよ。まずはそこに誘導してからではないと始まらない。
どちらにせよこれから起こる面倒ごとは避けられないだろう。
浩太は乾いた笑いをこぼしたのだった。

二人は数分後、空き地に到着した。

周囲には人ひとり確認できず、閑散としていた。
ここは元々ビルの建設が予定されていた場所なのだが、他に良い立地条件の物が見つかったらしく、半ばまで建設準備されたまま鉄材などが放置されていた。そのため滅多に人が来ないという訳だ。
ここなら気兼ねなく暴れられる。
すでに暴れること前提の考えになっていることには、突っ込んではいけない。
少しして浩太たちをつけていたコート姿の大男が空き地に足を運んだ。
大男は浩太たちが敢えて人目を避けたことを理解しているようで、その上でこちらの誘いに乗ったようだ。
まるで浩太たちを、いや浩太だけを値踏みするように全身を満遍なく舐るように見てくる大男の目。その目を向けられた浩太は薄ら寒い感覚に襲われながら、大男に警戒レベルを上げていく。
値踏みが終わったのか大男は顎に手を当て、満足そうに頷いた。
「……やはり、私好みのイイ体をしている」
大男の開いた口から低く掠れた音が響く。その声が空き地に広がっていき、浩太たちの耳朶に響いた。
凄みのある声に思わず身構える浩太。

そして、浩太は違和感に気付く。気付いて、しまった。できれば聞き間違いであってほしい。そう切に願いながら、エヴァに声を投げかける。

その時、浩太の声が震えていたのは、きっと気のせいではないだろう。

「……なあ、エヴァ」

「何だ」

「今、あいつ『イイ体』って言ったよな」

「言ったな」

「あいつはエヴァに目もくれずに、俺を見てたよな」

「そうだな」

「……ってことは、今の発言も俺に対して？」

「まあ、そうなるな」

「……」

「……」

（あ、こいつヤバイ奴（変態）だわ）

二人の心が一つになった瞬間である。

青褪めた顔をして、浩太は貞操の危機を感じた。流石のエヴァもドン引きものだ。

ゴミを見るような冷たい目を向けると、大男は犬のように荒い息を吐く。更に頬を赤

く染めて、口端からよだれが薄っすらと垂れているのが見えた。
目の前の現実に、浩太はどうしようもなく泣きたくなった。
今すぐ家に帰って泣き叫びたい気持ちに駆られるが、それを何とかグッと堪えた。それだけでも浩太は偉い。これが浩太ではない一般人ならば泣き喚き、逃げ出していたこと間違いなし。
目の前の大男が魔道具さえ所持していなければこんなことにはならなかった、と沸々と腹の底から怒りが湧き出してきた。
「う～ん、イイ目だ。蔑んだものから今度は怒りに変わったなぁ。クッ、ゾクゾクして堪らなくなるじゃないか⁉？　――今こそ全てを曝け出す時！　ハッァ！」
裂帛の気合いと共に、大男は着ていたコートを解放した。
そして、そこには、
一切何も身につけていない全裸の大男が立っていた。
そう、全裸でだ。
唯一、その体を隠していたコートが失くなったことで、とても世間やお茶の間では見せることのできない光景が浩太の目の前に広がっていた。
真っ正面から見てしまった浩太は、突然のことに頭が真っ白になった。隣に控えていたエヴァもモロに見てしまったようで、吐き気に口を押さえる。

浩太はその光景を理解するために、たっぷりと数十秒ほど時間をかけ、
「何つうモン見せやがるこの変態!」
理解すると同時に、強く握りしめた拳が大男の顔面を殴り飛ばした。

☆☆☆☆☆

「はぁ、はぁ、うっマジで気持ち悪い……」
「……同感だ。あの悍ましいものを今すぐ記憶から消し去りたい」
すでに二人は満身創痍。
浩太だけでなく、エヴァまでもここまで憔悴している姿は珍しい。六百年を生きた吸血鬼といえども、エヴァも女性であることに変わりはないのだから仕方がない。
肩で息をしながら、殴り飛ばした大男を確認すると、仰向けで大の字に倒れていた。そのため直視することが憚れるモノが白昼の下に曝されている。

この街にはロリコンと変態しかいないのか、と浩太は頭が痛くなった。
「イイパンチだ。危うく意識を飛ばしてしまうところだったよ！」
むくり、と立ち上がると恍惚とした顔で今しがた殴られた部分をさする大男。うん、この絵面はとても気持ち悪い。
そのまま死ねばよかったのに、という言葉が飛び出しそうになるが、逆に喜ばせてしまいそうなので我慢する。
「さて、もっと君との時間を楽しむためにこれを使うとしよう」
そう言って、奴は投げ捨てたコートから鞭と荒縄を取り出した。
恐らくエヴァが感じとった魔道具だ。
「あれ、どんな力があると思う？」
「鞭ならある程度想像つくが、あの縄に関しては全くわからん」
二人が荒縄の能力を推し量りかねていると、荒縄が一人でに動き出すと大男の体に巻きついていく。強く締めつけているようで、こちらまでギチギチと縄の音が響いている。
何故そこまで強く縛っているのだろうとか、恍惚とした顔で荒い息を吐いているとか、絶対に突っ込まない。突っ込んだら、負けてしまう気がした。
「どうしたんだい？　攻めてこないのかい⁉？　さっきみたいに遠慮なく殴っておくれ

よぉ！　さあさあさあ！　これ以上は待ちきれなくて私から攻めに行ってしまうよ！」
「ッ！」
捲したてるように叫んだら大男は一歩踏み出すと、浩太の体目掛けて鞭を振り下ろした。咄嗟に浩太は片手でエヴァを抱えると、後ろに飛んで鞭を回避する。
しかし、振り払われた鞭は動きを止めることなく、伸びた。そのまま鞭は蛇の如く動き、浩太の無防備な腕に叩きつけられる。
予想外の攻撃に避けることが出来ず、まともに受けってしまった浩太は腕に走る鈍痛に顔を顰めた。
「大丈夫か⁉？」
「なんとか。でもスッゲェ痛い。伸びるとか反則だろう……」
「あの鞭そのものに自動追尾の効果がありそうだな。それと鞭の長さを伸ばすこと。これが大まかな能力か」
「なのにこの威力とか。鉄パイプで殴られたみたいだ」
「あれは魔道具だ。魔力が通っている分強化されているに決まっているだろうバカめ」
「全く持ってその通りです」
エヴァの正論に、思わず目を逸らす浩太。
「とにかく鞭を避けてデカイのを一発叩き込めばいいわけだ」

「言うほど簡単にはいかんだろうがな。あの縄の能力も皆目見当がつかない。チッ、魔法が使えればあんな変態一瞬なんだがな」

忌々しそうにエヴァが舌を打つ。

このままでは彼女を巻き込みかねないと、浩太は後ろに下がるように言った。彼女は渋々といった様子で後ろに下がっていく。

その顔にはでかでかと不本意と書いてあり、それを見て浩太は苦笑した。

すっと構えて、全身に気で強化を施す。

浩太は一気に間合いを詰めて、鳩尾に拳を叩き込むために地面を蹴った。

「やっとヤル気になったようだね。さあ、どこからでもかかっグボォ⁉?」

浩太が瞬動で懐に潜り込み、正確に鳩尾を打ち抜く。

刹那、大男の声が遮られた。

大男の体から力が抜ける。いくら強化されたと言ってもこの一撃には耐えられなかったようだ。

あとは魔道具の回収すれば――

「馬鹿者！　まだ終わっていないぞ！」

エヴァの叱咤が静寂を切り裂く。

倒したと思い、浩太が気を抜いたほんの一瞬。エヴァの声に反応するよりも早く浩太

は腕を掴まれていた。
それは倒したはずの大男の手。
咄嗟に振り解こうと抵抗するが、ビクともしない。そうこうしている間に、
「今のはとても効いたよ。一瞬だけ気を失ってしまった！　実は私、攻めるよりも受ける方が好きなんだ！　折角良いものをもらったからね！　お返し、だ！」
「ッグ⁉？」
掴まれた腕を引かれて引き寄せられる。
目の前に待ち受けていたのは大男の固い石頭。
浩太は避けることが出来ず、それを顔面で受けてしまった。
腕の拘束を解かれ、後ろにたたらを踏んでよろめく。
そして、休む間も無く上段蹴りが叩き込まれて鉄材の山へと吹っ飛ばされる。浩太の体は鉄材に突っ込み、崩れた鉄材の中へと消えてしまった。
「おっと？　ついつい力み過ぎてしまったようだ。まあ、この程度で潰れる男ではないだろう。まだまだ楽しみ足りないし、あそこにいる子供でも使えば立ち上がってくれるかな？　――おや？」
そう言って、大男はエヴァが下がった方に目を向ける。
しかし、そこには彼女の姿はなく、鉄材が転がる音だけが虚しく響いていた。

☆☆☆☆☆

ぼうっとした意識の中、近くで甲高い音が耳朶を叩く。
徐々に意識が戻り、最初に見たのは間近に迫ったエヴァの顔だった。
美しく輝く金髪、白く透き通り人形のように整った顔に目を奪われる。
けれど、その美しい顔には似合わない険しい表情が張り付けられていて、その瞳に確かな怒りが燃えていた。
「馬鹿者。常に気を抜くなと教えたはずだぞ」
「ごめん……」
エヴァはいつものように怒鳴ることはなく、ただ静かに、言い聞かせるように言った。
それが、どうしようもなく恐ろしく感じた。一思いに怒鳴り散らしてくれたなら、どれだけ良かっただろうか。

浩太は彼女の顔を直視することに耐え切れず、目を逸らした。
けれど、今の二人の状態は仰向けの浩太の上にエヴァが覆い被さっている。
障壁を展開したエヴァが浩太を庇ってくれたからだ。そのため目を逸らしても、視界の端で今も尚彼女の鋭い眼差しが向けられているのが分かった。
「ごめんなさい……」
今の浩太には謝ることしか出来なかった。
今回は、いや、今回も浩太の落ち度。エヴァに怒られるのは仕方のないこと。なのに、それが情けなくて涙が溢れ出そうになる。
何よりもエヴァに嫌われてしまうのではないか。それが、一番怖かった。
真上からため息が聞こえて、浩太の体が恐怖で震え、ギュッと目を瞑った。
そして、エヴァの手が浩太の顔を包み、正面を向かせる。目の前には先ほどの険しさはなく、呆れたように笑うエヴァの顔が映った。
浩太はその光景に思わず目を丸くしてしまう。
「そんなに怯えるな、別にお前を責めている訳じゃない。怒ってはいるがな。お前に死んでほしくないから言っているんだ」
「ごみぇん……ふぁにすりゅんだよ」
再び浩太が謝罪しようとすると、エヴァが頬を引っ張って阻む。

「謝るのはもうなしだ。あの縄には身体強化の効果があるようだな。あのタフさと力にも頷ける。それを見抜けなかった私にも落ち度がある。すまなかった」
「エヴァが謝ることなんてない。結局は俺も悪いんだし、これでおあいこってことで。よし、この話終わり」
「……そうか、そうだな」
　クスクスと二人が笑い合う。
　エヴァの笑顔を見ただけで、先ほどまでの恐怖がいつも間にか嘘のように消えた。存外自分は現金な奴だな、と浩太は苦笑を浮かべる。
「取り敢えず、どうやってあいつを倒そうか？　さっきと同じやり方でも良いけど、あれ以上となると殺しかねないし」
「私の魔力もあと数分で尽きる。私もサポートに回れば問題なく勝てるだろうが、ここまで手酷くやられたんだ。自分の手で片をつけたいだろう？」
「ああ、絶対に俺があいつを倒す」
「な、なら、一つだけ即席で強くなる方法がある」
「本当か⁉？　だったらすぐやろうぜ」
「あ、ああ……」
　提案したエヴァは顔を赤く染めて、だんだんと語気が弱くなっていく。

普段の彼女らしからぬ態度に浩太は眉を顰めていると、か細い声が漏れる。
「そ、その、仮契約（パクティオー）だ」
「仮契約（パクティオー）？」
「簡単に言えば主従契約を結ぶものだ。この場合、私が主人でお前が従者。主人が魔力を送って強化することもできるが、生憎今の私では出来ない。そこで仮契約（パクティオー）することで得るアーティファクトを使う」
「アーティファクト？　魔道具みたいなものなのか？」
「似たようなものだ。アーティファクトは従者の潜在能力を更に引き出すアイテムだな。お前の潜在能力は高い。だから強力なアーティファクトが出るはずだ」
「おお！　で、どうやってやるんだ？」
「その、――ス、だ」
エヴァはゴニョゴニョとして上手く聞き取れない。
何故そこまで言いづらそうにしているのかと浩太は首を傾げた。
「もう一回言ってくれ。全然聞こえなかった」
「だから、キスだ！　キスで仮契約（パクティオー）するんだ！」
「キス」
「そうだ。そ、それも深い方だ」

「深い方」
　エヴァが羞恥に顔を染めて叫ぶ。
　それを聞いた浩太も瞬時に顔を赤く染め上げた。
「ほ、他に、方法は？」
「残念だがない。私が魔法を使えれば話は別だが血を吸っている暇もない。だがここ最近回収した魔道具の中に都合良く使い捨てのスクロールがあってな。それはキスでしか結べないものなんだ」
「いや、そもそも何でそれを持ち歩いてるんだよ」
「……たまたまだ」
「え、いや、でも――」
「たまたまだ！　本人がそう言ってるんだからそれで良いだろう⁉？」
「イエス、マム！」
　これ以上何か言おうものなら後が怖いので大人しく頷く。
　これからエヴァとキスをする。
　そう考えると自然に、彼女の唇に目が向いてしまう。
　いつも血を吸われる際に首元に押しつけられていた、あの柔らかな唇。それが、今から浩太の唇と合わさる訳で、

「――というか、何でエヴァもそんなに恥ずかしそうにしてんだよ！　こっちが余計恥ずかしくなるんだけど」
「し、ししし仕方ないだろ！　生まれてこの方六百年。一度もキスなどしたことがないんだよ！　そういうお前はどうなんだ！　まさかしたことがあるのか⁉？」
「ないよ！　俺も生まれてこの方一度もないよ！　ましてや今まで彼女もいたことないわい！　――あれ？　何だろう自分で言っておいて目から汗が」
「そ、そうか。……よかった。浩太もしたことないんだ」
エヴァが何か呟いていたが、さめざめと涙を流す浩太が気付くことはなかった。
「そ、それじゃあ、やるぞ……」
「お、おう。どんとこい！」
ヤケクソ気味に浩太が言い放つと、エヴァはスクロールを発動させる。
すると、浩太とエヴァの下に淡く輝く魔法陣が形成されていく。
決心したようにエヴァが浩太の両頬を包み、接近する。ゆっくりと、確実に二人の距離が埋められていく。
――そして今、二人の距離が零になった。
閃光が二人を包む。
エヴァの小さな舌が絡みつく深いキス。合わさった唇と舌に燃えるような熱が宿る。

スッとエヴァが顔を離すと、二人の唇に唾液の銀橋が架かった。
二人の間に出来た空間に一枚のカードが現れる。
そこには黒い刀を持った浩太が描かれていた。
これが、仮契約（パクティオー）したことにより得られたエヴァとの契約の証。同時に勝利の鍵となるもの。
二人は目を合わせて、コクリと頷いた。

閃光が消えていく。
大男は腕で目を庇いながら、それを見ていた。
次の瞬間、崩れた鉄材が吹き飛んだ。鉄材が大男を襲うが、それを避けることはなく全身で受け止めるあたり、もう手遅れな変態だ。
「ようやくかい？」
「ああ、悪いな。あんたこそ何で待ってくれてたんだ？」
「その方がイイ思いができると直感したからさ！」
「ああ、うん。聞いた俺が馬鹿だったわ」

浩太は呆れて、ため息を吐く。
「カードの使い方はさっき教えた通りだ。勝ってこい」
「ああ、勝ってくる」
エヴァの隣から大男の前まで歩いていく。
浩太は深呼吸を二、三度くり返して心を落ち着かせた。
「今度こそあんたをぶっ飛ばして警察に突き出してやる。それで終わりだ」
「それは無理だなぁ。私はまだまだ楽しみたいんだ。それに君に勝つことで、君の大事な貞操を奪うと決めているからね」
「……あんたが今まで捕まらなかったことに驚きだよ」
大男は不敵な笑みを漏らすと、鞭を構えた。
浩太もカードを構え、エヴァに教えてもらった魔法の言葉を紡ぐ。
「来たれ(アデアット)!」
それが合図となり、大男が鞭を振るう。
浩太は目の前に現れた黒い刀を掴む。それはカードに描かれていた黒い刀だった。
刀を抜く暇などなく、鞘に収めたまま鞭を弾いた。　気を抜かず、鞭の自動追尾に備える。
しかし、鞭が先ほどのように浩太を追尾することはなく、弾かれたまま大男へと戻っ

ていった。
　追尾が来なかったことに浩太は目を丸くする。それは、大男も同じだった。
「これは……。そうか、それが刀の能力というわけか。一体、何をしたんだい？」
「それが俺もさっぱりでね」
「なら分からない内にヤらないといけないな！」
　先ほどよりも早い一撃。
　避けることは造作もないが、この刀についてもっと知る必要があると判断した浩太は避けることなく、同じように鞘で弾く。
　警戒するが、やはり鞭が追尾してくる様子はなかった。
　今度はこちらからと瞬動で後ろに回り込み、鞘をつけたまま脇腹を薙ぐ。
　鞘は吸い込まれるように脇腹を打つと、鈍い音が響く。
　同時に呻き声と共に大男が片膝を地面につき、苦しそうに荒い息を吐いた。
　一度距離を取るために後ろへと下がり、隣のエヴァを一瞥して、
「なるほど、だいたい分かった。この刀の力は異能の無効化ってことか」
「その刀の銘は確か禍太刀（まがたち）だったはずだ。以前それを使っている従者を見たことがある」
「禍太刀（まがたち）、ね。よろしく頼むぜ相棒」

浩太がそう呼びかけると、僅かに禍太刀が震えた気がした。まるで浩太に応えているよう。

「さっさと倒してこい。私はもう腹が減った」

「はいはい。ご主人様の仰せの通りにしますよっと」

従者のように答えると、エヴァはご、ご主人様⁉？　と顔を赤くして固まってしまった。

固まる彼女を置いて、浩太は大男へと目を向けると、ちょうど苦痛に顔を歪ませながら立ち上がるところだった。

能力を無効化したことで、ようやくまともに攻撃が入ったようだ。

もう先ほどのようにお喋りをする余裕もないのか、すぐに鞭を振るう。

それをまた弾こうとしたが、鞭が鞘へと巻きつけられる。無効化される前に鞭を操り、浩太の動きを封じに来たようだ。

大男はニヤリと音が出そうな笑みを浮かべると、そのまま鞭を強く引く。浩太が近付いてきたところを仕留めるのだろう。

だが、浩太はその場から少しも動かない。

大男は焦るように鞭を引くがビクともしない。

当然だ。先までは殺さないように加減をしていたが、加減をする必要がないのならエ

ヴァの下で修行を積んでいる浩太に軍配が上がる。
この綱引きの勝敗など、やる前から決まっていた。
「せー、の！」
腕に力を込め、禍太刀をしっかりと握り込む。
そして、大男を勢い良く釣り上げた。
「うぉおおおおおお⁉？」
野太い悲鳴が迫る。
それを尻目に刀の小尻を掴み、突っ込んでくる大男の腹に柄頭を叩き込んだ。
その衝撃は彼の肺に残る空気を全て吐き出される。
怯んだ隙に鞭を絡め取って後ろに投げ捨てると、次いで鞘から刀を抜き放ち、荒縄を斬り捨てた。
この間、僅か三秒である。
「グァア、ク、とても、イイ、一撃だ！　まだ、まだだ……まだ終わらんよ！」
「おいおい、大人しく寝てた方が楽になるぞ」
「それは無理な相談だ。私は一秒でも長くこの至福の時間を味わっていたいからね」
「ああ、そう……」
荒縄を斬ることで能力は失われたはずだが、依然大男は倒れる様子がない。むしろ、

先ほどよりも興奮していた。
重い一撃を食らっても倒れないことはすごいと思うが、相手が変態なだけに素直に賞賛できずに浩太は呆れて言葉も出ない。
浩太は「去れ（アベアット）」と呟いて、刀をカードに戻した。
大男は浩太の行動に一瞬目を丸くする。
「どういうつもりだい？　刀を消したりして。それを使えばいいじゃないか」
「もうあんたに使う必要がないだけさ。それじゃなくても喜ばせるだけだろうしな。それに、安心しろよ。次の一撃で終わるから」
「それは残念だ。まだ私は君の貞操をもらっていないからね」
両者構える。
そして、同時に地面を蹴った。
大男が拳を繰り出す。少し遅れて浩太も拳を振り抜く。
眼前に迫る大男の拳。浩太はそれを真横すれすれで躱すと、大男の顎を正確に撃ち抜いた。数瞬後、大男の身体から力が抜けて、膝から崩れ落ちる。
浩太は今度こそ大男が気絶したことを確認すると、脱力してその場に座り込んだ。大男の表情はとても満足そうにしていて、何だか複雑な気分になった浩太だった。

☆☆☆☆☆

「それではこいつの身柄はこっちで預かるよ」
「お願いします」
あの後、すぐに警察に通報。
到着した警察官、戸塚さんから事情聴取を受けていた。
警察が来るまでにエヴァとは口裏を合わせておいて、変態に襲われて返り討ちにした、とだけ話した。
当然、魔道具のことは伏せた。警察とはいえ魔道具の存在を知られるのは拙いと判断したからだ。
大男は戸塚さんの指示でパトカーに詰め込まれる。
そして彼は浩太へ振り返ると、
「そういえば君の名前は佐藤浩太くん、だったよね」

「そうですが……」
「もしかして良太さんの息子さんかい？」
その名前が出た瞬間、浩太の顔に影がさした。
隣にいるエヴァはそれを感じ取り、怪訝そうに浩太を見る。
「そう、ですね。俺の父です」
「あの事件はとても残念だったね。惜しい人を亡くしたよ」
「……ありがとうございます。そう言って頂けるだけでも、父も喜んでると思います。
――それじゃあ、そろそろ俺たちはおいとましますね」
「ああ、もう暗くなってきたし送っていこうか？」
「いえ、大丈夫です。それでは……」
戸塚さんに頭を下げて、エヴァの手を取ると浩太は足早に去っていく。
まるで、この場から逃げ出すように。
「おい、どうしたんだ浩太？」
「何でもない、何でもないよ。それよりも今日は何を食べたい？　腹減っただろ」
「……そうだな。お前に任せるよ」
「それが一番困るんだけどな……」
浩太は明らかに何かを隠している。父親の名前が出た時の浩太を見れば、すぐに分

かった。
しかし、それを知られたくないのか、話をはぐらかされた。無理矢理聞こうとも思ったが、いつか話してくれるだろうと、エヴァは大人しく引き下がる。
今はこうして二人きりの時間を楽しもう、とエヴァは浩太の腕に抱きついて微笑んだ。

――背後まで迫りつつある悪意に、気が付かずに。

吸血鬼と学校

まだ誰もが寝静まる早朝。
浩太は一人、庭で素振りをしていた。
呼び出した禍太刀をしっかりと握りしめて振り下ろすと、閑散とした早朝の庭に空気を裂く音が響いては消えていく。
これは、エヴァとの仮契約で得た禍太刀を使いこなすために追加された修行だった。
せっかく武器を手に入れても、使いこなせなければ宝の持ち腐れ。
もしかしたら、戦いに慣れた者が魔道具を所持している可能性もある。前回は何とかなったが、そういつも上手くいくとは限らない。
エヴァも詳しいわけではなかったが、剣の基礎ぐらいの知識は有していたので、それを叩き込まれた。そのかいもあって、今では浩太も人並みに剣を振るうことができるまでに成長していた。
……地獄のような修行を受けた、と言えば後はわかるだろう。

今朝は素振りだけで済ませると、褐太刀を戻して、シャワーで汗を流す。そして、朝食の準備に取り掛かる。それが浩太の日課だ。

しかし、今日はいつもと少し違っていた。

何故なら、いつもならまだ眠っているエヴァが、朝食を作っていたからだ。

思わず、浩太は目を丸くして固まってしまったが、すぐに気を取り直す。

「おはよう、エヴァ。それで？　何してんだよ」

「見て分からないのか？　朝食を作っているんだ」

「いや、それは分かるけどさ。どうしてまた？」

「いつも世話になっているからな。何よりいつまでも借りを作るのは嫌なんだよ」

「別に好きでやってるようなもんだし、気にしなくていいんだぞ」

「それでは私が納得できないんだよ。ええい！　お前は黙って座っていろ！」

エヴァに言われるがまま、浩太は食卓の椅子に腰を落とす。

特にすることもないので、頬杖をついて料理しているエヴァを見ていることにした。

エヴァは自作したらしい白のフリル付きエプロンを身につけて、必死な表情を浮かべてフライパンと睨めっこをしている。

普段から自作した服や浩太のワイシャツを着ている姿しか見たことがなかったので、エプロン姿のエヴァは新鮮だった。

ふと、浩太は思った。まるで新婚夫婦みたいだな、と。
まさに今の状況は不慣れな料理に悪戦苦闘する妻を見守る夫の構図ではなかろうか。
一度そう思ってしまうと、なかなか頭から離れない。だんだんと顔が熱くなるのを感じた浩太は手で顔を押さえた。
「どうしたんだ？　料理を運ぶのを手伝って欲しいのだが」
「いや、何でもない。手伝うよ」
いつの間にか作り終えたらしいエヴァは怪訝そうに浩太を見ていたが、追求される前に立ち上がって料理運びを手伝う。
首を傾げるエヴァだったが、特に追及されることはなかった。
運び終えた二人は対面に座ると手を合わせて、
「「いただきます」」
朝食のメニューは焼き魚に白米、卵焼き、味噌汁といった和食。
白米は普通に炊けているが、焼き魚と卵焼きは所々焦げが目立つ。味噌汁の具材もまばらな大きさだった。
浩太はまずは味噌汁を一口。
エヴァは落ち着かない様子で浩太を見ている。

「――うん、普通だな」
「何だその感想は！　もっとこう美味いとか、毎日飲みたいとかそういうのはないのか！」
「いや、考えてもみろよ。この間まで料理のりの字もできなかったエヴァが普通の味を出せるようになったんだぜ？　現段階での最高の褒め言葉だろ」
「それは、まあ、確かに……」
　エヴァは納得いかないと口を尖らせて、そっぽを向く。
　その姿はまるで幼子がいじけているようで、中身と容姿が伴っていないことに浩太は苦笑いを浮かべた。
「ちゃんと美味いから安心しろって」
「本当か⁉？」
「ああ、美味しいよ」
「そ、そうか。それならいいんだ。……良かった。美味しいって言ってもらえた」
　エヴァは浩太に見えないように俯いて笑った。その笑顔は普段浮かべている不敵な笑みではなく、純真な少女の柔らかな笑顔だった。傍から見ればブラックコーヒーが飲みたくなるような桃色空間を作り出しているのだが、二人は気付かない。

しばらくして、朝食を食べ終えた浩太は朝食を作ってもらったので食器洗いをしようとしたのだが、またもやエヴァがやるということで渋々引き下がると、部屋に戻って登校準備をする。

制服に袖を通して、教科書などを突っ込んだカバンを持って階段を降りると、ちょうど食器洗いを終わらせたエヴァがソファに座って寛いでいた。

「悪いな、食器洗いまでしてもらって。明日からはまた俺がやるからゆっくり寝てていいんだぞ？」

「いや、明日も私がやるからお前は気にしなくていい。それよりも今朝の分、吸わせてもらうぞ」

「そういえばまだだったな。……もう制服なんだけど血、つけないでくれよ？」

「お前の血を一滴も零すつもりはないから安心しろ」

エヴァは浩太の手を強引に引いてソファに落とす。瞬く間に浩太の膝上を陣取ると不敵に笑って、そう言った。

艶やかな雰囲気を漂わせるエヴァに、浩太はとっさに顔を逸らしてしまった。彼のために行っておくと、決してエヴァの顔を直視出来ないとか、そういうことではない。そう、違うのだ。

首筋にエヴァの牙が突き立てられ、ズブリと沈む。

軽い鋭痛に顔を歪ませるが、これも慣れたもの。すぐに痛みに順応した。エヴァはゆっくりと、味合うように血を吸い上げていく。

浩太としてはエヴァの髪から香るシャンプーの匂いと密着する肢体の柔らかさが理性をぶっ壊しにきているので、早々に切り上げてほしいと切に願っていた。

どれだけ時間が過ぎたか分からないが、ようやく満足したのか牙が首筋から抜かれた。その拍子に噛み跡から血が流れる。制服についたら面倒くさいので慌てて押さえようとしたところに、なんとエヴァが流れる血を舌で舐め取ったのだ。

ぬめりとした、生暖かい感触にブルリと体が震える。

羞恥に顔を染めた浩太が抗議の目を向けると、舌舐めずりして妖艶に微笑む吸血姫が、そこにいた。

これが六百年を生きた貫禄。

漂う色香に、浩太は思わずゴクリと生唾を呑んだ。

「どうした、惚けた顔をして」

「な、何でもない⁉？　も、もう学校行くから！」

「ああ、またあとでな」

すぐさま浩太はエヴァを横に下ろすと、カバンを持って家を飛び出して行った。

だからこそ、エヴァが最後に言った言葉は浩太に届くことはなかった。

☆☆☆☆☆

家から逃げ出した浩太は消沈とした様子で、教室の机に突っ伏していた。
浩太はエヴァと仮契約（パクティオー）を結んでからというもの、今までよりもエヴァを強く意識してしまっていた。
最近では、吸血時以外にもエヴァがくっついてくるようになったので密着する機会が多い。なおかつ、今朝のように料理を作ってくれるようになった。
これだけされて、彼女を意識しないなんてことがあるのだろうか？　――いや、ない。
浩太は頭を左右に強く振って、一旦エヴァの件から離れると、修行について考える。
地獄というのも生温い修行を積み重ねてきたお陰で、気と体術、瞬動術についてはある程度習得したと、エヴァからお墨付きをもらっている。
最近では気の応用技、性質変化も出来るようになった。

エヴァの世界では気を雷に変えて技に乗せる剣術があるらしく、雷ができるなら他の性質に変化させることも出来るのではないか、と要練習。最初は苦戦していたがイメージを強く持つことで、少しではあるが火と風、雷に変化させることに成功した。

刀に関しては基礎しか納めていないので、浩太自身が我流の剣術として昇華させなければならないのが目下の課題の一つだ。

そして今現在、最難関の課題であるのが究極技法（アルテマ・アート）『咸卦法』の習得である。

咸卦法とは本来相反する魔力と気の二つを融合させた技法。究極と言われるだけあり効力は絶大。これ一つで身体強化の最高クラスの効果を発揮して、他にも戦闘方面に必要な要素を補うことが出来る。

発動媒体ないし詠唱が出来ないため、魔法こそ使えない浩太だが、魔力操作は気の操作と並行して修行していたので使えるようになっていた。

今まで使う機会がなかったが、こんなところで役に立ってくると思うと、エヴァには師の才能があるのだろう。

これで咸卦法の条件は揃った。けれど、魔力と気を融合させることが出来ずに暴発ばかりくり返しているのが現状だった。

究極技法（アルテマ・アート）と言われるほどだ。習得が困難を極めるのは目に見えていた。

しかし、こうも失敗が続くと浩太の心に焦燥が募っていく。

エヴァへの意識を紛らわせるために修行について考えたが、気分が滅入ってしまい、浩太は長いため息を吐いたのだった。

ざわざわと騒々しい教室の戸が開いて担任の先生がやってくると、朝のＳＨＲが始まるのだが、先生がそれを遮ると生徒に静まるように促す。

ひとしきり生徒が静かになったことを確認すると、おもむろに口を開いた。

「突然だが、今日は転校生がやってくる。早くクラスに馴染めるように、お前ら仲良くしろよー」

「先生先生！　転校生は女子ですか？　かわいいですか⁉？」

「それとも男子？　イケメンがいいなぁー」

「あー、転校生は女子だ。しかもなとびっきりの美少女だ！　だからと言って男子、あまりはしゃぐなよ」

先生の言葉にクラスの男子が騒ぎ出す。

中には立ち上がったり指笛を吹く者までいた。このテンションはうざい。女子も男子の熱気に引いていた。これからやってくる転校生も気の毒なものだ。

「そろそろ静まれよ。入ってきていいぞ！」

騒いでいた男子がみんな一様に、揃って口を閉ざす。
閉められた戸がゆっくり開けられると、そこには件の転校生が立っていた。
端正な顔立ちに綺麗で滑らかな金髪、白く透き通った肌。その美貌に女子が息を呑む。
そして、彼女が歩くたびに豊かな双丘が揺れ、男子、だけでなく女子の目も釘付けにしていた。先生が言っていたように、確かに美少女である。
しかし、浩太は何故か既視感を覚えた。
（んんん？）
「彼女が今日からうちのクラスメイトになる篠崎雪姫さんだ」
「篠崎雪姫です。急な転校で私自身不安なことがたくさんあるのですが、皆さんと仲良くしたいと思っています。これから、よろしくお願いしますね」
（んんんんん？）
教壇前にいる篠崎は蒼い瞳と金髪こそ今は家にいるであろう居候のエヴァと該当するが、名前が違えばその体型も異なる。篠崎はロリ体型ではなく年相応の体つきだし、何よりエヴァには皆無の胸がある。エヴァがこんなところにいるはずがない。――だというのに、言い知れぬ不安に冷や汗が止まらない。
そして、クラスメイトに微笑んでいた篠崎と浩太の目が合った。

その瞬間、彼女はクラスメイトに気付かれないようにニヤリと嗤った。一瞬のことだったので、クラスメイトは誰ひとりとして気付いていない。

浩太には、その笑顔に覚えがあった。というか、毎日見ているとても見慣れたものだった。

「篠崎の席は窓側の一番後ろだ」

「わかりました」

篠崎は浩太の後ろの席へと歩を進める。

先生が言ってから、浩太はようやく自分の後ろに席が増えていることに気付いた。エヴァのことで頭がいっぱいだったこともあり、気付かなかったのだ。

彼女はゆっくりとした足取りで、浩太の横を通り過ぎることはなく、カバンから何かを取り出すとコトリと、机の上に乗せた。

――それは、いつも浩太が使っている弁当箱だった。

今朝は急いで家を飛び出したので、浩太は弁当箱を持っていない。

つまりは、そういうことだ。

浩太は顔を蒼褪めさせて、すっかり錆びついてしまった首をゆっくりと持ち上げる。

すると、そこには不敵に嗤う吸血姫がいるではないか。

「今朝は急いでるみたいで、お弁当を忘れてたよ？」

篠崎、いやエヴァは笑顔で爆弾を落とした。
しんっと静まり返る教室。
数秒後、クラスメイトの絶叫が湧き上がった。

「――それで、何でエヴァがここにいるんだよ」
「転校してきたからに決まってるだろう」
「そういうことじゃねえ！　一体何企んでんだよ⁉？　お前のせいでクラスの男子からは殺意のこもった目を向けられるわ、女子から好奇の目で見られるわで俺の精神的疲労がヤバイんだけど⁉？」
「役得だろう？」
「ど・こ・が・だ⁉？」
浩太は荒い息を吐き、激しく肩を上下させる。
あの後の休み時間は、当然クラスメイトたちに詰め寄られた。エヴァに質問をするよりも先に、浩太の下へ。

浩太も突然の事態に困惑しながらエヴァの事情をボカしながら説明する中、エヴァはおかしそうにクスクスと笑っていた。今日の夕食にニンニクを大量に使うことが決まった瞬間である。

休み時間の度に押しかけてくるので、浩太はこれ以上の追求を避けるべく。昼休みになってすぐにエヴァを教室から連れ出し、屋上のベストプレイスへと逃げ出して、今に至る。

「本当に何しに来たんだよ……」

「何、家に居ても暇でな。折角だから、高校生活を体験してみようと思ってな。ほら、私は元の世界では延々と中学生を繰り返していたから、高校に興味が出てな」

「で、本音は？」

「お前が居なくて寂し――フンッ！」

「がぁあああ⁉？　何故ここで目潰し⁉？」

エヴァの本音を聞き出そうと誘導したところ何かを言いかけたが、目潰しを喰らい、襲ってくる激痛にのたうち回りそれどころではなく聞き取らなかった。

「ぐぉおお、まだ目が痛ぇ」

「ふ、ふん。ほら、弁当も私が作ったんだ。説明は食べながらちゃんとしてやる」

「……いただきます」

弁当を受け取るとエヴァにジト目を向けながら、黙々と箸を進める。
うっ、と若干気圧されながらエヴァが口を開く。
「高校に興味があったのは本当だ。だからまず、催眠魔法を使って教師陣を洗脳した。戸籍の方も偽造と催眠をかけて来たから安心しろ。そして、元の世界と違って流石に少女の体じゃ問題があったからな。幻術で成長したように見せている」
「聞いてて頭が痛くなってきた……。もう何でもありだな、魔法って。これで低級ってマジヤバくね？」
「確かにそうだが、それは私という悪の魔法使いだからこそ出来ることさ」
「ええい！　胸を張るな、胸を！」
「ん？　何だ、触りたいのか。素直に言えば良いものを。ほら、触ってみるか？」
「やめなさい、思春期男子にそれは効く！」
エヴァは胸を押し上げて、身を乗り出すと浩太に迫る。
抗議しつつも目はしっかりと胸に行ってしまうあたり、浩太も男の子ということだろう。たとえ、目の前で揺れる双丘がまやかしだったとしても、ついつい意識してしまうのは男の子として仕方ない。だって、本能だもの。
『別にいいじゃねぇか。本人が触っていいって言ってんだから触っちまえよ。そして揉め。揉みしだけ！』

浩太の中で悪魔が囁く。

（いや、しかし……）

『何だぁ？　お前は不能か？　それともホモなのか？　違うだろう。健全な男子高校生なら女のおっぱいを揉んでみたいと思うのは至極当然。しかも幻術とはいえ、それはエヴァクオリティー。本物以上の感触がお前を待ってるぜ』

（た、確かに）

悪魔の口が裂けて、弧を描いて嗤う。

彼の言葉に心揺さぶられ、浩太の手がエヴァの胸に伸びかける。

『駄目だよ！　そんなの不純じゃないか！』

『チッ、うるさい天使（ヤツ）が来やがった』

しかし、それは天使の登場により阻止された。

天使良くやった！　と思う反面、残念に思う自分がいることに、がっくりと肩を落とす。

『そういうことは結婚してからなんだよ！』

『ハッ！　餓鬼め。幼稚園レベルの発言などどうでも良いのだ！』

『何だと、この欲望まみれの屑悪魔め！』

『褒め言葉だね』

天使と悪魔の口論が続く。

けれど、それは突然終わりを迎える結果となってしまった。

何故なら、ボフンッと音を立てて、エヴァが元の少女体型に戻ったからだ。

「あ、魔力が切れた……」

「ふ、ふふ」

「何を、笑っている？　いや、いい皆まで言うな。どうせ幻術が解けて元に戻ったことを笑っているのだろう。いいさ、またすぐボン、キュ、ボンな姿になってやるからな。――貴様の血を吸ってなぁ！」

「うぉお⁉？　ちょ、別にお前を笑ったわけじゃねぇ！」

「うるさい、うるさい、うるさーい！　お前は黙って血を吸われろ！」

「理不尽⁉？　あ、ちょっとほんとにま――アァアァアァアァアァ！」

突然エヴァが元に戻るものだから、葛藤していた自分が馬鹿らしくなって、思わず吹き出してしまった。

けれど、それを馬鹿にされたと勘違いしたエヴァは羞恥と怒りで顔を真っ赤にして、浩太の血を吸うべく飛び掛かる。

もちろん、日々の修行の疲労と今朝の吸血で貧血気味の浩太にエヴァを止めることなどできるはずがなく、吸血を許してしまうのだった。

☆☆☆☆☆

「――であるからして、――となる。ここは次のテストに出すからノートに書いて覚えておくように」

カリカリ……。

教師の言葉に従って、クラスの奴らがノートにペンを走らせる。

それを横目で確認しつつ、私は教科書をパラパラとめくっていく。

内容は歴史。どうやら、向こうの世界もこちらの世界も辿ってきた歴史（モノ）は同じらしい。すでに知っていることをもう一度聞くということほど、退屈なものはない。

私はため息を吐いて教科書を閉じると、頬杖をついてバレないように横にいる浩太を見やる。血を吸われたことでやや辛そうにしながらも、真剣な面持ちで授業を受けているようだ。

血を吸ったことは八つ当たりが強かったので悪いと思いつつ、自分の知らない浩太の顔が知れたことが嬉しくて、小さく笑った。

（やはり学校に来て正解だったな）

私が学校に通うことにした理由は二つある。

一つは、家に一人でいることが退屈で、寂しいということだ。

寂しいということは口が裂けても浩太に言わないが。さっきは目つぶしでやり過ごしたが、知られてしまった日には、記憶の改竄を検討しなければならないだろう。

もう一つは、浩太を一人にしない、ということだ。

きっかけは、あの屋上の戦闘で見せた殺意だった。そして、この間会った戸塚とかいう警官が話していた父親のこと。

浩太の家に住むようになってから、家族の話について一度も触れたことはない。浩太が家に私を運び込んで最初の数日間は、出かけているだけだろうと思っていたが、それは違った。

浩太が学校でいない間に家の中を見て回っていた時に、私は仏壇を見つけた。

それが何故か気になった私はゆっくりと戸を開けた。

――そこには、浩太の両親と妹であろう人の遺影が置いてあったのだ。

何かがあったと考えてはいたが、私は何も聞かなかった。隠し事の一つや二つ、誰しもが抱えているものだから。

だからこそ、私は浩太が話してくれるまで待つことにした。きっと、いつか話してく

れることを信じて。私は気を遣うことができる大人の女だからな。

……今何処かで私のことをロリババアだの幼女(笑)だの言われた気がするが、気のせいか。

この時、エヴァの世界に存在する図書館の地下深くで、くしゅみをするロリコンがいたとかいなかったとか。

とにかく、私は浩太の隣に居続けよう。支えあい、一緒に生きていこう。

浩太の横顔を見つめながら、そう、思った。

――だが、浩太と一緒に居たいという私の思いが叶うことなどないことを、この時の私には、知る由もなかったのだった。

少年と修行

「さあ、逃げまどえ！こちらの魔力は、お前から吸い上げた分しかないのだから限りがある。せめて一分程度は持たせてみせろ！」

「無茶言うんじゃねえ!!？　っていうか、この状況で逃げられるか！」

クハッ！と、悪の魔法使いモード全開のエヴァが魔方陣を展開。

それを四方五〇メートル間隔に配置することで、そこから無数の氷塊を乱れ撃つ。

氷塊は拳ほどのものから、浩太の身長を優に超えるものが入り混じり、緩急をつけて浩太に襲い掛かる。

まさに戦々恐々とした面持ちで、浩太は氷塊を避けていく。

浩太の世界では、魔力を扱えるものないし精霊が存在しない。そのため、エヴァですら精霊を介さない低級程度の魔法しか使えない、はずだった。

では、何故エヴァが魔法を行使できるのか。

あれは、先日のこと。

いつものように魔道具を捜索していたところ、新たに魔道具の回収をすることができ

た。

魔道輪。それが魔道具の名だ。

この魔道具(ゆびわ)には、中級の精霊が封じ込められていた。それも、エヴァが最も得意とする”氷”と”闇”属性の内の一つである氷の精霊だ。

まさに、今のエヴァのために用意されたような一品だった。

魔道輪を手に入れたからこそ、エヴァは魔法を行使できるようになったのだ。

そのため、今まで魔法が使えなかった鬱屈とした思いの反動か、修行の時は思いっきりはっちゃけるようになった。

浩太の修行がより苛烈なものになったのは、言うまでもないだろう。

「来たれッ!(アデアット)」

次々と放たれる氷塊の軍勢に、避けるだけでは対処が困難になり、浩太はすかさず叫んだ。

禍太刀を呼び出し、抜刀。

迫る巨大な氷塊を無理に壊すことなくいなし、小さなものは斬り払う。

そのまま氷塊を対処しながら、少しずつ移動。

向かう先には、魔法陣。

エヴァの魔力切れを狙うのは難しい。

やはり、六百年生きてきたのは伊達ではない。浩太の血から得た魔力が残りわずかとはいえ、彼女の魔力運用は一切の無駄がなく効率的だ。

このままでは、先に自分が潰れると判断した浩太は、少しでもエヴァの攻撃を減らす選択をした。

氷塊に対処しながら、距離を詰めていく。

残り一〇メートルほどまで迫ったところで、地面を強く踏み込み瞬動。それと同時に気を練り上げ、性質変化させることで生み出した炎を、全身から波状に放出した。

高火力の炎の波が壁となり、小氷塊は瞬時に溶け消える。大氷塊は溶けるまでには至らないが、勢いを削ぎ落とすことに成功。

そのまま突っ込み、通りすがりに禍太刀で魔方陣を切り裂いた。

禍太刀の異能の無効化により、魔方陣が消滅していくのを確認しつつ、次の行動へと移る。

「ハッ！」

残り三つの魔方陣に向けて、禍太刀を三度振るう。

――我流、斬空閃。

炎により威力の弱まった魔法陣へと、螺旋状に回転する斬撃が見事に三つの魔法陣の中心点を捉え、破壊する。

納刀。一呼吸し、調息。
「マジで、危なかった……。おい、エヴァ！　お前絶対に俺を殺す気だったろ！」
「それぐらいやらねば強くならん。死んだならすぐに生き返れ！」
「無茶苦茶だ⁉？　俺は不老不死じゃねぇんだぞ！」
「ふん。まあ、流石にそれは冗談さ。――ああ、それと頭上注意だ」
「お前のは冗談に聞こえな、頭上？」
浩太は言われるがまま、上を見上げる。
上にはなんと、巨大な魔法陣が展開されているではないか。
全身から冷や汗が滝のように流れる。
浩太は魔法陣を指差し、顔を引き攣らせながら口を開く。
「あ、あの、これは？」
「いったい、誰が設置した魔法陣が四つだけだと言った？」
「は、はは、確かに、そうだったな。でも、ちょーっとこれは大き過ぎではないでしょうか？」
「くふ、ふふふふ――さて、神への祈りは済ませたか？」
「会話の余地すらない⁉？　クッソ、こんなの耐えられるわ――」
「フハハハハ！　喰らうがいい！　氷槍弾雨！」

「ちょ、ま――」

次の瞬間。人気のない山の中に、浩太の断末魔が響き渡った。

あの後、最初に受けていた氷塊よりも早く、頑強な氷槍群が一斉に浩太へと降り注いだ。

魔法の範囲から離脱、氷槍群を打ち壊すことも出来ないと瞬時に判断した浩太は全身を気で最大強化、併せて形態変化による炎も最大火力で身に纏い、防御態勢を取って耐え忍ぶ。それでもやはり氷槍が炎を抜けて、全身に鈍痛が走る。魔法の発動から数十秒ほど経っただろうか。そこでようやくエヴァの魔力が切れたため、全身擦り傷だらけにはなったが、何とか凌ぐことが出来たのだった。

「痛え……もう少し、加減というものをだなあ」
「もちろん、十分に加減してやったさ。そうでなければ、お前は今頃ボロ雑巾のように地べたに這いつくばっていたさ」
「今もボロボロなんだが？」
「かすり傷程度だろう。そんなものでボロボロとは、片腹痛い」

木陰の中、浩太は木に背を預けて傷の手当てをしながら、愚痴をこぼす。
クハッ、とそれを面白そうに笑うエヴァ。
ああ、そういえばこういう奴だったわ、とげんなりした気分でエヴァが作ったおにぎりにかじりつく。
「うん、美味い」
程よい塩加減がいい塩梅で、形も綺麗に整っているおにぎり。
ついこの間まで、ロクに料理をしてこなかったエヴァが作ったとは思えない出来だ。
「当然だ。ほら、おかずも作ってきたからこっちも食べろ」
眼前に差し出される弁当箱の中には、おかずが綺麗に並べられている。どれもとても美味しそうで、おおっ、と浩太の口から感嘆する声が上がった。
エヴァから箸を受け取り、弁当箱から卵焼きを取って口に運ぶ。

「甘いな」
「ん？　ああ、お前は卵焼きは甘めの味付けの方が好きだろう。だから、そうしたんだが違ったか？」
「いや、そんなことはないけど。よく見てるんだな、俺のこと」
「……ええい！　お前はさっさと黙って食え！」
「モガァ⁉」
顔を赤くしたエヴァは卵焼きを箸で取ると、勢いよく浩太の口内へと突っ込んだ。
突然のことに、対応できなかった浩太は、急に箸ごと卵焼きを突っ込まれて苦しそうに悶えている。
そう、何を隠そうこの吸血姫。
毎食中、常に浩太の反応を見るべく、気付かれないよう細心の注意をはらい、観察していたのだ！　それも、浩太に直接料理の好みを聞くと、浩太のことがすk――好ましく思っている、と思われるのが恥ずかしいという理由で。
そのためエヴァは浩太に指摘され、羞恥に顔を染めながら、これ以上何も喋らせない、聞かせないために料理で口を塞いだのだ。喋らせないどころか、永遠に口を封じそうな勢いだったことは、現状の浩太を見れば明らかだろう。
照れ隠しで殺されそうになるとは、浩太も災難である。

「ゲホッ、ゲホッ⁉？　おいエヴァ！　お前俺を殺す気か⁉？」
「うるさい！　うるさーい！　お前は黙って食べていればいいんだよ！」
「だから、無理やり食べ物を口に突っ込むな！　喉が詰ま、ちょ、モゴォ⁉？　ンンッ――――⁉？」

☆☆☆☆☆☆

「酷い目にあった……」
「ふんっ！　飯を食べさせてやっただけでその態度とは呆れたものだな」
「お前、あれでどうやったらそんな態度取れるんだよ。もう、なんか一周回って尊敬するわ」
腕を組んで横柄な態度を取るエヴァを横目で見つつ、浩太は水筒の水を飲んで喉を潤

す。
「まあ詰め込まれたことは、置いとけないが置いといて。普通に弁当は美味かったよ。ごちそうさま」
「お、おお、ありがと……急にそんなこと言うのは、反則だ」
「何か言ったか？」
「何でもないっ！」
　弁当のお礼を告げると、エヴァは先ほどとは打って変わり、急にしおらしい態度に変わる。最後に何か呟いた気がしたので、聞き返すが怒鳴られてしまい、浩太は怪訝な表情で首を傾げるのだった。
　少しして、ようやく落ち着いたらしいエヴァが口を開く。
「さて、今からさっきの反省会でもするとするか」
「りょーかいです、師匠」
　先の修行の講評を聞くため、居住まいを正したところで、浩太の横にいたエヴァが立ち上がる。
　何だ？　と怪訝そうに浩太がエヴァを見ていると、浩太の上にドカッと腰を下ろし、寄りかかってくるではないか。上に乗られたことで、エヴァの柔らかい感触がダイレクトに伝わる。寄りかかり、胸にかかる艶やかに煌めく金髪からは、整髪剤の甘い香りが

漂っていた。
　顔に、血液が集まっていくのが分かる。鏡を見るまでもなく、俺の顔は真っ赤になっているだろう。
「おい、何のつもりだ？」
「ここにちょうどいい椅子があったからな、座っているだけさ。何だ、何か問題でもあるのか？　うん？」

「別に、なんも問題ねえよ」
　エヴァは挑発するように、頭をぐりぐりと押しつけながら、こちらを見上げてくる。その顔にはあくどい笑みが浮かんでいた。
（こ、この野郎っ！　絶対にわかってやってやがる！）
　正解。この吸血姫、確信犯である。
（よ、よしっ！　浩太も、少しは私のことを意識してる。い、勢いでやってしまったが結果オーライというやつだな！　こ、こんなことナギにもしたことがないのだから意識してもらわねば困るんだがな！）
　表にこそ出さないが、内心羞恥に悶えているのは、エヴァも同じであった。この吸血姫、余裕ぶった態度を取っているが生きてきた六〇〇年間マトモな恋愛をしてこなかっ

たせいで、かなり初心なのだ。
「と、とにかくさっさと反省会始めようぜ」
「そ、そうだな……」
　二人の間に、なんとも言えぬ空気が漂い始めたところで、その空気を払拭するように浩太が切り出す。エヴァもそれは同じだったようで、素直に頷く。
　慣れないことは、するものではない。エヴァは一つ、教訓を得たのだった。

「お前の気の制御や形態変化、瞬動や身のこなしはだいぶ様になってきたな。修行を始めて半年でこのレベルならたいしたものだ」
「そうなのか？」
「ああ。基準となるものがないからわからないだろうが、今のお前なら麻帆良の中級魔法生徒を圧倒できる。アーティファクトの禍太刀を使えば、上級ともいい勝負ができるだろうな」
　ふーん、と気のない返事が出る。
　気の力によって身体能力が向上し、鉄を難なく破壊できる膂力や手加減されているとはいえ、エヴァの魔法にも耐えられる強靭な肉体へと強化することができる。また、気

の形態変化や瞬動術などの技術も併せて教えてもらっているので、エヴァの言うように遅れを取ることはないのだろう。

「だが、お前は魔力感知ならびに周囲を見る目が足りないな。この間まで一般人だったことを考えれば、仕方のないことだが」

「うっ、まあ、確かに。魔力は少しは感じられるようにはなってきたけど、まだまだだし。周りを見るのも、どうしても目の前のことに集中しちまって、周りが見えなくなるっつーか」

「今後も魔道具の回収をしていくのなら魔力感知は要練習だな。以前のように戦闘になることもあるだろうし、周囲を見る目も鍛えていかねばな」

「はは、お手柔らかに……」

エヴァの言う通り、今後も魔道具探しを続けていくのなら魔道具から微かに発せられる魔力や魔道具を手にした者の魔力を把握するために、魔力感知やは必須技能だろう。戦闘の際もエヴァがいなければ周りを把握できないのも痛手になる。

いつも、エヴァがいるわけではないのだからこれは要練習だ。

――とは言ったものの、エヴァと一緒に行動していない自分を全く想像できないの

は、一体何故なんだろうか。

そんな疑問が、浩太の脳裏を過った。

「まずは魔力感知から鍛えていくとしよう。お前が覚えれば、私も少しは楽ができるしな」

「おい。……周りを見る目はどうするんだよ」

「それに関しては、先のようにお前の知覚範囲外から攻撃することで養っていくさ。今後、お前が全体を俯瞰し行動できるようにならない限り生傷が絶えることはないだろうな」

「ああ、死ぬの確定したわこれ……」

これから起こる回避しようのない未来に対して、遠くを見ながら絶望する。

この時、既に考える余裕が無くなった浩太の頭には先の疑問など、綺麗さっぱり消え去っていた。

「早速教えていく――と思ったが、今日はこのぐらいにしておくか」

「え、どうしたんだよ」

「私の魔力を使って訓練するつもりだったが、生憎と魔力が切れている。今日は修行の

ためにいつもより血を吸ったことだし、お前もボロボロだからな。そんな状態では修行に身も入らないだろう」
「……明日は槍が降りそうだな」
思わず、本音がポロリと漏れてしまった。
瞬間、ギロっとエヴァのつぶらな瞳が吊り上がり、こちらを射殺さんばかりに睥睨する。突如として発生した剣呑な雰囲気に、浩太の全身から滝のような冷や汗が吹き出す。できるのなら、数秒前の自分を全力で殴り飛ばしたい。
「ほーう？　もうボロボロで、今から何をやっても身にならんからと貴様を労ったつもりだったが、どうやら余計な気遣いだったようだなあ。え？　浩太」
「め、滅相もございません」
「まあ、私は寛大だからな。この程度でいちいち腹を立てはせん」
「本当ですか？」
「ああ。――今後の修行は、覚悟することだな」
「……サー、イエッサー」
腹を立てるどころではない。エヴァは、完全にブチ切れていた。
この怒りをぶつける先が、修行になるのも仕方のないことだろう。何故なら、合法的に痛ぶることができるのだから。

原因である浩太は、力なく敬礼を返すことしかできないのだった。

「今日はパスタの気分だ」
「美味しいものを作らせていただきます」
「食後にはデザートもつけろ」
「イチゴのショートケーキをご用意いたします」
「今日の修行で疲れてしまったなあ」
「マッサージをさせていただきます」
哀れ。
今の浩太が、エヴァに逆らうことなどできない。それが分かっているからこそ、エヴァもどんどん注文をつけていくわけだ。現に今エヴァはクツクツと笑っていた。
だが、それでも浩太は従うのみ。全力で媚びを売って、エヴァの機嫌を取り、少しでも修行の苛烈さを和らげるために！
そう浩太が心内で誓っていると、エヴァは笑みを消して、真っ直ぐに来た道を見つめていた。
怪訝な顔をした浩太が首を傾げる。

「エヴァ？」
「ーーいや、何でもない。それよりも早く帰るぞ。私は腹が減った」
「りょーかい。帰ったらすぐに支度するよ」
材料まだあったかな、と冷蔵庫の中を思い出しながら浩太は帰路に着く。その後を着いて行かずに、エヴァは再度来た道へと振り返る。
風が吹き、木々がざわざわと揺れ動く。
遠くからカラスたちの鳴き声が聞こえ、そこはかとなく不気味な雰囲気が漂っていた。
（……一瞬ではあるが、視線を感じた）
先の浩太とのやり取りの際、舐るような視線を感じ振り返ったが、すぐに消えてしまった。周囲の野生動物や山に来た人間ではない、何かの視線。
一抹の懸念が残るが、まだこちらに危害を加えられたわけではない。
エヴァは頭の片隅に留めておくことにして、踵を返すと浩太の下へと走り、その勢いで背中へと飛びついた。
「っと、いきなり飛びつくなよ」
「私のような美女をおぶれるのだから役得だろう」
「自分で言うな、自分で」

「うるさいぞ。ほら、さっさと歩け」
「……仰せのままに、お姫様」
　エヴァの不遜な態度に辟易としたように返す浩太だったが、その口元は僅かに持ち上がっていたのだった。

吸血鬼と学校祭準備

「それじゃあ、学校祭でのうちのクラスの出し物を決めようと思います。一先ず、何でもいいのでどんどん意見を出していってくださーい」

教壇に立つ委員長が、案を出して行くように促す。

それをきっかけに、すぐに何人かの生徒が挙手をしていく。

エヴァが学校に来るようになって半月ほど。浩太たちは今まさに、二ヶ月後に控えている学校祭の出し物を決める会議を行なっていた。

「はい！　はーい！」

「そんなに大声出さなくても聞こえてるわよ。じゃあ、加藤さん」

「私は喫茶店がいいと思う！　簡単な軽食と飲み物なら私たちでも準備できるし、喫茶店ならハズレはないと思うの」

「確かに定番だよね。書記ちゃん黒板に書いていってね。それじゃあ、他に意見ある人はいるかな？」

すると、またすぐに挙手する者や案を出すために、グループを作って相談を始める者

たちが出来上がる。先生も学校祭に関してはあくまで、生徒たちに主導させるようで、わいわいと騒ぐ姿を見ても止める様子はなく放任していた。

（……学校祭、か）

浩太自身、学校祭が嫌いなわけではない。

だが、何故か面倒ごとに巻き込まれる予感がひしひしとするため、周りのクラスメイトのように盛り上がるような心持ちではなかった。

チラリ、と隣を見やれば、エヴァが周りに気付かれない程度に辟易とした表情を浮かべている。学校一の美女と、男女ともに持て囃されているエヴァのこんな表情を見たら、彼らはどんな顔をするのだろうか。

「行事ごとで盛り上がるキャラじゃないのは分かってるけど、どうしたんだよそんな顔して」

浩太が小さな声で、問い掛ける。

エヴァが渋い顔をして、こちらに顔を向けた。

「私が何年学校祭を経験してると思っているんだ？」

「ああ……それはそんな顔にもなるか」

「別に嫌いというわけではないんだ。私も麻帆良で学生を始めた最初の三年は、楽しんでいたさ。だが、それから何回も繰り返しているからな。流石に飽きるというものだ」

エヴァが登校地獄で、麻帆良に封印されていた期間は十五年。

つまり、学校祭を十五回も繰り返してきたわけだ。年に一回とはいえ、確かにこうも多くては、飽きがきても仕方がないだろう。浩太は自分が同じ立場になっても同じことを思うと同時に、延々と繰り返す恐怖に背筋を冷やした。

「登校地獄のせいで強制的に参加しなければならないし、ジジイに抗議しても『儂じゃ呪い解けんから諦めろ』と言われるし。本当に散々だった。……思い出したら、腹が立ってきたな。ジジイの全身の毛が抜け落ちる呪いでもかけるか」

「やめろ」

呪詛を唱え始めたので、すぐに止める。

周りにクラスメイトがいるのだから、そういうことは人の目のない家でやってくれ。

呪いをかけること自体は止めないのかって？

……呪いを受けるのは、他人だし。こちらに被害が及ばないのなら、思う存分好きなように、盛大にしてもらって構わない。それに学園長（ジジイ）はエヴァに対して肯定的だったようだが、もっと他にフォローすることができたはずなのに、しなかった。だから、これはエヴァを怒らせた自業自得というものだ。毛が抜けることぐらい、甘んじて受けるべきだろう。

エヴァと過ごす中で、徐々にＳっ気が移り始めている浩太だった。

「しかし、周りは元気なものだな」
「まあ、お前みたいに擦れてないし。まだまだ遊びたい盛りだからじゃないか？」
まだ学校祭は始まっていないというのに、学校祭最中のような盛り上がりを見せるクラスメイトたちが、どんどん意見を提案している。
黒板には俺とエヴァが話している間に数々の案が書き出されていた。
・喫茶店
・お化け屋敷
・マジックショー
・人形劇
・映画製作（濡れ場あり）
・メイドカフェ
いろいろな意見が書き出されている中で、一つ。明らかに、問題なものが紛れていた。
「おい、委員長」
「何かな佐藤くん」
「一つ明らかにおかしいものが紛れているんだが、何でそのまま案として書き出しているんだ」
「ああ、映画製作だね。それは池崎くんの案だね」

「その通り！　僕が提案したものさ」
　委員長に名を呼ばれ、池崎はキラリと光る爽やかな笑顔を浮かべて立ち上がる。とても、そんな綺麗な笑顔をする奴が出すような案ではないのだが、人は見かけによらないな、と浩太は思った。
「自分で言うのもなんだけれど、僕は顔が整っている。いわゆるイケメンだ」
「本当に自分で言うことじゃないな」
　エヴァ、お前が言うな。それはブーメランだ。
「それもこのクラス一と言っていい」
　鼻高々に宣言する池崎。自分の顔に相当自信があるらしい。
　自信満々な池崎に、浩太を除いたクラスの男子全員の殺意を宿した眼が集中する。
「あいつ堂々と俺たちのこと蔑んだよな」
「処す？　処すよな？　処すか」
「よし、殺そう」
　男子たちの殺意は、最高潮に達していた。
　全員が池崎の殺害計画を企てているが、当の本人には全く聞こえていないらしい。まあ、自業自得なので放っておこう。
「つまりクラス一の美男子である僕とクラス一の美少女である篠崎さんが主演を務めれ

ば、大勢の観客を動員することが出来る！　そうすれば学校祭の最優秀賞を取るのも夢じゃないんだよ！」
「おう。それなら別に濡れ場がある必要ないよな。なんで提案したんだ」
「――ふっ。僕も、男ということさ」
池崎は、したり顔でそう言った。
こいつ、意味が分からないし、気持ち悪いぞ。
男子たちは池崎の言動に身を震わせ、女子たちはまるで汚物を見るような、冷たく蔑んだ眼差しを向けている。
池崎の気持ちの悪い思いを向けられているエヴァは、うっすらと顔を青くして、身を守るように自分自身を両手で抱きしめていた。
六百年という長い時間を生きてきたエヴァにここまでさせるとは、相当だ。
「どうかな篠崎さん。僕と一緒に最高の映画を作ろうじゃないか！」
「は？　絶ッ対に嫌です」
「……おっといけない。どうやら聞き間違いをしてしま――」
「いや、聞き間違いではないですよ。貴方となんて死んでもごめんです」
「なん、だと……」
まさか断られるとは微塵も考えていなかったようで、池崎は驚愕の表情を浮かべる。

私情を含んだ、いや、私情しかない提案だ。相手がエヴァでなくとも断られるのは明白だろう。
「もし仮にやるとしても、それは貴方じゃない」
「なっ、い、一体それは誰なんだい」
「浩太くんです」
迷いなく即答したエヴァは、隣の浩太へ親指を指し示す。
話の渦中に巻き込まれた浩太は、突然のことに口をあんぐりとして固まってしまった。
「そ、そんな。まさか、佐藤くんなんかに、この僕が負けるなんて……」
「おい池崎。お前あとで話がある」
あまりに失礼な物言いに、固まった思考が動き出す。
男子たちはこっぴどく振られた池崎を『ザマァｗｗｗ』と笑って一度は溜飲を下げたが、すぐに浩太へと標的を変えた。
急に向けられた男子たちの嫉妬の視線に、思わず浩太は後ずさる。
「はいはい。男子たち静まれー」
「元はと言えば、委員長がスルーして書き出したことが原因なんだが」
「まあ、それは置いておいて。池崎くん。篠崎さんが断ったらダメって言っておいたん

だから、この案はなしってことでいいよね」
「そ、それは……いや、そうだよ。この僕が断られるなんておかしい！
何かの間違いなんだ！」
「お前なぁ――」
「いや、断られるに決まってるよね」
なおも認めようとしない池崎に浩太が口を開こうとした瞬間、委員長の言葉がピシャリと響いた。
「え、委員長？」
「池崎くんは確かに顔はいいけど、性格と言動が残念過ぎるんだよね。だから割と女子は池崎くんのこと、必要最低限の関わり以外は避けてるんだよ。池崎くんに近付くのは、何も知らない新入生だけなんじゃないかな」
「え、な」
「それに篠崎さんは普段から佐藤くんの家でお世話になってるし、好感度は高め。佐藤くん自体も困ってる人を助けたりして、学校のみんなからの反応は結構いいんだよね。だから、池崎くんじゃなくて佐藤くんが選ばれるのは必然なんだよ」
「ちょ、ま」
「それに池崎くんが選んだのが篠崎さんじゃなくても、みんな断ってたと思うよ？

ちょっと気持ち悪過ぎて生理的に受け付けないもの」
「「「「うん、うん」」」」
「グハッ……」
　委員長の切れ味鋭い言葉のナイフが、池崎を滅多刺しにする。急に打ち明けられた真実と周りの女子たちが、それに同意するように頷いているのを見た池崎は血を吐き出して、その場に崩れ落ちた。
「それじゃ、映画製作はボツってことで。今ある案から決めようと思うんだけど、みんなはどうかな？」
　哀れ池崎。
　彼が倒れても、最初からいなかったように会議は進行していく。
　男子たちも流石に少し不憫に思ったようで、憐れみの視線を向けている。向けるだけで、誰も助けにはいかないが。
　彼の今後の人生に幸あれと、天に祈っておこう。
「うーん。せっかく綺麗な篠崎さんがいるんだから、その持ち味を活かしたいよね。となると、やっぱりメイドカフェかな。服を用意して、簡単な仕草と口調を勉強すれば何とかなると思う。それにメイドカフェなら喫茶店と同じように軽食も取り扱えるし、一石二鳥だもんね」

「確かに、加藤さんの言うとおりだね。みんなも他に意見はないかな？」
委員長の言葉に、誰も否定の声を上げない。
むしろ、みんな乗り気のようだった。
「現状は問題なしっと。そういうわけなんだけど、篠崎さん。メイドカフェ、私たちと一緒にやってもらえないかな」
エヴァは指を顎に添えて考え込む素振りを見せる。
だが、浩太には分かる。考えているようだが、その実、非常に面倒くさいと思っていることを！
エヴァの考える姿を見ていた男たちが、全員おもむろに立ち上がり、こちらまでやってくるとその場で土下座を始めたではないか。
「「「「篠崎さん！　どうかメイドをやってください！　お願いします！」」」」
必死の懇願。
純粋に学校祭をより良いものにしたいという思いも根底にあるのだろうが、男子たちの顔を見る限り、下心があるようだった。
「そんなに私にメイドをやってほしいの？」
「是非とも！」
「かわいい篠崎さんのメイド姿が見たいっす！」

「篠崎さんの容姿でメイドをしたら男なんてイチコロさ！　大繁盛間違いなし！」
息を荒げる男子たちが、矢継ぎ早に話していく。
ふむ、とエヴァは一度頷くと浩太へと顔を向けた。
「ねえ、浩太」
「どうしたエ、雪姫……」
「あなたも、私のメイド姿見てみたいの？」
急に何を言い出すんだこの吸血鬼は。
「いきなり何だよ？」
「……いいから、早く答えろ」
訳がわからずに浩太が問い返すと、学校用に取り繕ったものではない、いつもの口調で答えを急かされる。
（エヴァのメイド姿か……）
エヴァの基の素材が最高品質であるため、きっとメイド服を着ても似合うし、その魅力を最大限発揮することができるだろう。きっと、学校祭も成功間違いなしだ。
そう考えて――――
「見てみたい」
浩太は、エヴァにそう答えた。

「そうか、そうか……よし。委員長、ここまで頼まれてしまっては仕方がないですし、私はメイドやっても大丈夫ですよ」
「ありがとう篠崎さん。これで学校祭は最高間違いなしだね！」
エヴァは浩太の返答に数度頷き、満足といった様子で委員長にメイドとして参加する旨を伝えた。委員長と女子たちがエヴァの快諾を受けて喜び、男子たちは涙を流しながら歓喜の雄叫びを上げる。
こうして、俺たちのクラスの出し物はメイドカフェに決定したのだった。
――――――恥ずかしくて、絶対にエヴァに揶揄われるから本人には決して言わないが、エヴァの普段見ることのできないメイド姿を見てみたいと思ったことは、心の内に秘めておこう。

無事に学校祭の出し物が決まった浩太たちは、役割を分担し、早速準備へと取り掛か

り始めた。
浩太を含めた男子たちは材料の買い出しや教室の装飾、宣伝用看板の作成。
女子たちは軽食類のメニューの考案。本やネットを使って、メイドについて調べている。その中で、エヴァは一家言ある持ち前の服飾スキルを活かし、雑貨店で購入したコスプレ用のメイド服をアレンジしていた。
エヴァ曰く、「この私が着るんだぞ？　そのまま着るのではなくアレンジを加えて、今よりも良いものにする」ということだ。
最初は渋っていたのに、何故急にやる気になっているのだろうと浩太は怪訝そうに首を傾げる。……まあ、擦れていると思っていたが、何だかんだエヴァも学校祭が楽しみなのだろうと納得することにした。
現在、男子陣営は宣伝用の看板とポスターの作製を行っていた。男子たちの熱は凄まじく、ああでもない、こうでもないと議論を繰り返している。一体何がこうも男子たちを熱中させているのだろう。男子たちが思春期過ぎるのか、浩太が周りに比べて冷めているのか。恐らくその両方だろう。
熱気に当てられないよう、離れた場所で装飾作りをしている浩太は呆れた目で男子たちを見ていた。
「佐藤くん。いま、大丈夫かな？」

「ん？　どうしたんだ委員長」
　作業の手を一旦止める。
　委員長の方に向き直ると、その手にはメジャーが握られていた。
「佐藤くんって身長何センチかな？」
「一応、１７５はあるけど……なんでそんなこと聞くんだよ」
「それはまだ秘密で。じゃあちょっと失礼しまーす！」
　委員長は意味ありげに、口元で指を立てる。
　そして、持っていたメジャーを使って俺の身体を手早く測り始めた。
「ちょ、本当に何なんだよ？」
「そのうち分かるから、それまで待ってね。それじゃあ、ご協力ありがとうございました！」
　委員長は身体のサイズを測り終えると、こちらに問いただす隙を与えず、足早に去って行ってしまった。
　委員長はその足で離れた場所で作業をしていたエヴァに合流。そのまま何か話し込んでいる様子だ。男子の給仕用の服でもしつらえているのだろうか。
　気になることではあるが、きっと教えてもらえないだろうと、浩太は準備作業へと戻った。

後に浩太は、是が非でも聞き出しておくべきだったと、酷く憔悴した様子で語ることになるのだが、この時の浩太には知る由もないのだった。

「篠崎さん。佐藤くんのサイズ測ってきたよ」
「ん。ありがとう委員長」
「ふふふ。当日、楽しみだね」
「ええ。こちらで調整さえすれば、お客への受けもきっと良いはずだもの」
「でも、本当に着てくれるのかな？」
「それは私に任せて。――――修行をネタにゆするとするか」

少年と学校祭

時間はあっという間に流れ行く。
気付けば、学校祭は明日が本番。
浩太たちのクラスは細やかではあるが、景気付けにと装飾等が施された教室で前夜祭を行なっていた。軽食を摘みながら、みんなが明日への思いを吐露し、笑顔が溢れている。
みんなのその様子を見ながら、この二ヶ月の準備期間は本当にいろいろなことがあったな、と浩太は感慨深く今日までのことを思い返す。

例えば、メイドカフェで出す予定の料理を試作してみんなで食べたり。

「はーい！　みんな味わって食べてね。それで感想聞かせてね！」
「うめぇ、うめぇよぉ……」
「生きててよかった……」

「母さん。俺を産んでくれてありがとう……」
「もー、みんな大袈裟だよー」
男子たちが涙や鼻水で顔をグチャグチャに濡らしながら、女子お手製の料理を食べている姿はとても悍ましいのなんの。教室を通りがかった生徒たちが悲鳴を上げて逃げていくほどだった。
「ダメだコイツら。重症だ。飯作ってもらったくらいで、何だってんだよ」
「佐藤キサマァ！　お前にはわかるまい。女子の手料理にはなあ、どれだけ金を出しても足りないぐらいの価値があるんだよ！　お前はいつも篠崎さんの手料理を食べることができるからわからないだろうがなぁ！　……クッソ羨ましいです！　その立場代われくださいコノヤロー！」
「桐島、お前が何を言ってんのか全然わからないんだが」
桐島は浩太の反応に対して、怒髪天を衝く形相となって捲し立てる。
何故か隣にいるエヴァも、霧島に同意するように深く頷いているではないか。
「何だよ雪姫」
「いえ？　貴方も料理を食べると時、みんなのようにもっと反応してくれてもいいじゃないか、なんてこれっぽっちも考えてないから」
「いや、それはもう考えてるようなもんだろ。それに、コイツらみたいな反応はちょっ

と、いやかなり嫌なんだが。……大した反応はないかもしれんけどさ。いつも美味しいと思ってるし、これでも作ってもらって感謝してるんだぜ。まあでも、こういうのはちゃんと言葉にしなきゃか。いつもありがとな雪姫」

「えっ、あ、その、ど、どういたしまして……」

なんか照れくさいな、と浩太はうっすらと熱を持った頬に手を添えて笑う。

少し小言を言って揶揄ってやろうと画策していたエヴァだったが、思わぬ反撃（感謝）を喰らってしまった。気恥ずかしさから浩太から顔を隠すように俯いてしまう。その顔は赤く染まり、嬉しそうに微笑んでいるのだが俯いているため、誰の目にも映ることはなかった。

「全く君たちは。今日まで女子の手料理を食べてこれなかったのかい？　可哀そうに。ま、僕ほどとなれば女子の手料理なんて両手じゃ数えられないぐらい食べているけどね」

やれやれといった様子で呆れた声を上げるのは池崎だった。

ついこの間。男子と女子にボロボロにされたばかりだというのに、相変わらずキザな態度を崩さないその精神（メンタル）の強さには素直に称賛に値するのだが、学習しないというか何というか。

「どれどれ、せっかくだから僕もご相伴に預かろうかな」

そう言って、池崎はまだ残っていたオムライスを手に取る。
「いただきます。うーん、卵の殻のジャリジャリとした硬さとお米のぐちゃぐちゃとした柔らかさが奏でる不協和音。そして、砂糖の強烈な甘さの後に襲い来る苦味はまるで炭を直接口の中に頬張っているような錯覚を覚えて――――グボァ」
「池崎――――！」
池崎がオムライスの感想を述べたと思ったら、急に顔を青くして泡を吹いて倒れてしまった。
何事かと確認すると、本来オムライスにはケチャップライスがあるはずなのだが、彼が食べたオムライスの卵の下には真っ黒に染まったナニカが存在していた。それからは黒い瘴気のようなものが漏れ出ている。
「おい雪姫。何だこの化学兵器は。一体誰がこんなものを生み出したんだよ」
「い、いや、私もこれについては知らないのだけど……」
「あ、それ私が作ったやつだね」
「「委員長が作ったの（か）⁉」」
「そうだよ。おかしいなぁ。今回は上手く行ったと思ったのに」
何が駄目だったんだろう、と本気で考えている委員長。
池崎の感想と見た目を見る限り、全部が駄目だと思う。

それは周りのクラスメイトも同じことを思ったようで、全員が顔を顔を引き攣らせていた。

「……とりあえず、委員長には料理をさせないということで」

『異議なし！』

「どうして⁉」

池崎という尊い？　犠牲により、委員長の料理の腕が発覚したため、満場一致で委員長には料理をさせないということが決まった。本人は納得いかない様子だが、学校祭を楽しみに来たお客さんの命が危険なため、当然の措置だろう。

委員長のことも強烈ではあったが他にも、クラスの男子たちに事前調査という名目でメイドカフェに連れていかれたっけ。

「「「「おかえりなさいませ、ご主人様♡」」」」

『ただいまー！』

「馬鹿しかいねえ……」

メイドたちに囲まれてだらしない顔を晒す男子たちに、遠い目をする浩太。

そもそも何故自分たちがここにいるのだろう。メイドに扮するのは女子たちなのだ

から、来るとしたら女子たちが正解のはずだ。
女子がここに来るのはハードルが高いだろうから、自分たちが調査しよう。なんて桐島が宣っていたが、調査にかこるけてメイドカフェを存分に楽しもうとしている魂胆が透けて見える。当然他の男子も考えることは同じようで、誰も異を唱える者はいなかった。
浩太はエヴァや女子たちに知られた後が怖かったので、辞退したのだが桐島たちに拘束され、あれよあれよという間にここまで連行されてしまった。
(どうかバレませんようにっ!)
浩太は天に懇願した。
「ご主人様。ご注文はお決まりでしょうか?」
「え、あ、じゃあパンケーキを一つ」
来てしまったからには、何も頼まないわけにもいかず。浩太はメニュー表を手に取り、すぐ目に入ったパンケーキを頼むことにした。
注文を取ったメイドは「少々お待ちくださいね♡」と猫撫で声で言うと、厨房へ消えていく。それと入れ替わるように、メイドたちが桐島たちの注文した料理を持ってやってきた。
「こちらのオムライスにケチャップでお絵かきしていくんですが、何かリクエストはあ

りますか？」

「『桐島くん大好き♡』でお願いします！」

はーい、とメイドは手慣れた手つきでケチャップを巧みに動かし、あっという間に桐島の要望通りかつ綺麗に書き上げていく。

やはり、場数が違う。一朝一夕で、できる芸当ではない。

メイドの立ち振る舞いに言葉遣いと他にもやらなければならないことはたくさんだ。こういった練習をする時間もないので、ハート等の簡単な記号系で対応するべきだろう。

浩太は思ったことをメモに書き記す。

「それでは最後に美味しくなる魔法をかけますので、ご一緒にお願いしますね！　美味しくな～れ！　萌え♡　萌え♡　キューン♡」

『萌え♡　萌え♡　キューン♡』

駄目だ。こいつら、全力で楽しんでやがる。一応事前調査という名目で来ているのだから、少しは取り繕えよ。

浩太はジト目で桐島たちを見やり、諦観のため息を漏らした。

「ご主人様。お待たせいたしました、パンケーキです！」

「ありがとうございま、うわぁ……」

写真など見ずに文字だけを見て、適当に選んだパンケーキにはこれでもか、というほど大量の生クリームがかけられていた。その上からチョコレートもふんだんにかけられていて、パンケーキの姿がほとんど見えなかった。

途轍もなく胃に重そうなパンケーキを前に、思わず圧倒されてしまう。

「ご主人様もご一緒に魔法をお願いしますね！　美味しくな～れ！　萌え♡　萌え♡　キューン♡」

「萌え、萌え、キューン……」

……恥ずかしすぎる。メイドも桐島たちもなんで全力でこんなことができるのだろう。俺が彼らと同じことをするには恥も外聞も全て投げ捨てないと無理なんだが？　いや、考えるだけ無駄だな。きっと理解なんてできっこない。あいつらは俺とは違う生き物なんだと思っておこう。

考えることを放棄し、パンケーキを食べようとフォークを探すが、見当たらない。恐らく持ってくる時に忘れてしまったのだろう。持ってきてもらおうと、メイドへと顔を向けて止まる。

何故なら、メイドの手に探していたフォークが握られていたから。

「あの、フォークもらっても？」

「ご主人様がご注文になった『～チョコとクリームの海に溺れたい～パンケーキを添え

て』はメイドからのあーん付きなので、私が食べさせてあげますね♡」
「それそんな名前だったのか。というか、メインがチョコと生クリームに盗られてるんだが？　もはや申し訳程度についてるパンケーキは要らないのでは」
浩太の呟きなど気にも留めず、あ～ん、と差し出されるパンケーキ。
メイドはニコニコと笑顔を浮かべていた。浩太が受け入れて食べるまで、てこでも動かないという気迫が感じられる。
これは、さっさと平らげて帰ろう。
そう考えた浩太は大人しく受け入れることにした。
何故かはわからないが、最近食事の際にエヴァがやたらとあーんをしてくる。エプロン姿だったり、わざわざ膝上に乗ったりとシチュエーションは様々。一体どこのバカップルだよ！　と、何度も恥ずかしい思いをしてきた所為（お陰）で、今更あーんをされた程度では全く動じない精神（メンタル）が出来上がっていた。
「それでは、あ～ん」
「……あー、ん」
一口。
瞬間。想像通り襲い来る甘味の濁流。これを頼むお客は純粋にパンケーキを楽しんでいるのではなく、メイドに食べさせてもらえることに意味を見出しているのだろう。

そうでなけれな好き好んで糖尿病への片道切符を頼む猛者は存在しないはずだ。
メイドとのやり取りを見ていた男子たちから熱くギラついた視線を送られているが、いちいち反応していては疲れるだけなので、浩太は無視を決め込む。
その後も男子たちの殺気に晒されながら、差し出されるパンケーキを親鳥からエサをもらうひな鳥のように粛々と食べ続け、食べ終える頃にはあまりの甘さにやられて案の定気持ち悪くなってしまっていた。
「最後まで食べられてすごいです！　これを最後まで食べきれる人なかなかいないんですよ」
「あはは。そうなんですね……」
いや、それなら商品として出すなよ。もったいないだろ。
思わず、出かけた言葉をなんとか飲み込んで、浩太は愛想笑いを浮かべた。
「おい桐島。俺はもう帰るからな」
「メイドさんにあーんしてもらったお前を殺したいほど妬ましい（そうか。あとは俺たちがしっかりと調査するからいいぞ）」
「おい。絶対に本音と建前逆だろ」
桐島に帰る旨を伝え、会計を済ませて店の外へと出た浩太は胃を擦りながら、今日の夕飯はさっぱりしたものにしようと決めた。

「はあ……エヴァたちに見つかる前にさっさと帰ろ」
「ほう？　誰に見つかる前に帰るって？」
「だからエヴァに……エヴァさん、いつからそこに？」
「お前がそこのメイドカフェに入った時からだが」
「わあ、最初から……」
　帰ろうと一歩を踏み出そうとしたその時。背後から今一番聞きたくない声が聞こえ、冷や汗が流れる。浩太はギッギッギッと首が錆びついたロボットのようにゆっくりと振り返る。
　果たして、そこにはエヴァが触れられるほど間近に無表情で立っていた。
　あまりの恐怖に悲鳴を上げなかった自分に対して、浩太は内心で褒め称える。
「私たちが服の準備やメイドになり切るための練習をしている間に、お前はメイドカフェを満喫していたわけか。――いいご身分だな？」
「あ、のですね。一応メイドについて調査して、みんなに共有しようとしていまして」
「ほう？　メイドにあーんされて鼻を伸ばしていただけではないと言うわけか」
「いや、鼻は伸ばして――」
「あ？」
「何でもありません」

完全にエヴァの目が『口答えするな。殺すぞ』と物語っている。弁明をしても無意味だと悟った浩太は瞬時に押し黙る。この現状を招いた原因である桐島たちへの復讐を密かに誓いながら。

「今日からの食事は私が食べさせるから」

「はい」

「浩太も私にちゃんとあーんで食べさせること」

「はい」

「もちろん学校でもしてもらうからそのつもりで」

「え、流石に学校は人の目が――」

「あ？」

「わかりました」

無表情に、淡々としているエヴァが怖い。とにかく怖い。

逆らわず、黙って、素直に従う。それが唯一生き残る道だ。

この後、本当にエヴァの言う通り。家でも学校でもお互いに食べさせ合うことになり、その光景を見ていたクラスメイトひいては学校中の生徒たちから『バカップル』と認定されるのだが、それはまた別のお話。

――――本当にいろいろなことがあったなあ。
遠い目をしながら、浩太はしみじみと今日までのことを思い返す。
大変ではあったが、まあ充実したものになった、と心からそう思う。あとは明日の本番で全てを出し切るのみ。
「どうしたそんな遠い目をして」
「雪姫。いや、まあ、いろいろと思い返してただけ」
「それは明日からの本番が最高するまで取っておけ。どうせ思い返すことが増えるからな」
「あー、確かにそうかも。無事に終わってくれるといいんだけど」
「あまりそう口に出すなよ。フラグになる」
「りょーかい」
隣にいるエヴァと話していると、周りがそろそろお開きにする流れが出来始めていた。浩太たちはゴミ等や出していた物を手早く片付けると、明日に備えてそれぞれ帰路へとつく。
「いよいよ明日が本番かぁ」
「そうだな。ま、ここまで準備したんだ。せいぜい楽しませてもらうさ」
「全員分の服の調整してたもんな。お疲れさん」

「まあ、趣味の範疇だからな。そこまで苦でもなかったさ」
「そっか。……明日、頑張れよ」
「ああ。お前も頑張れよ、浩太」
「え？　お、おう」
ニヤリとエヴァが笑う。
背筋に何か冷たい感覚が走り、ゾワゾワとする。
けれど、その正体には皆目見当がつかず、浩太は首を傾げるだけで考えることをやめた。

??????????????

学校祭当日。早朝の教室。
全員が各々の衣装に着替えている中。絶賛浩太は、今にもここから逃げ出したいという思いに駆られていた。
女子たちはもちろんメイド服に。
あくまで女子のメイドがメインではあるが。男子たちだけ制服では格好がつかないため、男子たちもギャルソンに身を包み、給仕として女子たちのサポートに入る手筈になっていた。
もちろん、男子のギャルソンについてもエヴァが一口噛んでいる。
男子たちは今日ようやく服をもらい、始めて袖を通す。事前にサイズ等は測っているし、エヴァが手を加えているため、今日まで試着はしていなかったが全員問題なく着ることができていた。
桐島たちが「カッケー!!?」「これは女子たちからモテまくるぜ!!?」「篠崎さんの愛情を感じる……」と、騒いでいる姿に呆れつつ、浩太もエヴァから服を受け取る。そして、渡された服を見て固まった。
「どうしたの浩太？　固まったりなんてして」
エヴァがそれは、それはもう愉快そうに話しかける。
「……冗談はこのぐらいにして、さ。早く服をくれないか」

「あら？　一体何が冗談なのかしら」
「いま俺の腕の中にあるメイド服のことだよ！」
浩太は、諸悪の根源であるエヴァを睨みつけながら叫んだ。
こんなことをするのは、エヴァしかいないという確信があった。現に本人もそれを認めるように、愉しそうに嗤っているではないか。
クッソこの合法ロリ吸血鬼がッ！
「俺にもちゃんと男子用の衣装をくれよ！」
「残念だけど買い出しの時点で、男子のものが一つなくてメイド服が一つ余分にあったのよ。買い直そうにも他にも買わなきゃいけないものはたくさんあって、予算がなかったの。だからこれは仕方のないことなのよ」
「くっ！　なら俺は裏に引き篭もって調理をしてるから。わざわざ着る必要ないだろ」
「それはダメよ。ちゃんとローテションで役割を振ってあるし、何より女子に乱暴する人もいるかもだし守ってもらわないと」
「そのために、他にも男子を配置してるじゃないか」
「あら？　あなた以上に心強いボディーガードがこのクラスにいるとでも？」
どんどん最もらしい理由を並べ立て、逃げ道を塞がれていく。
今日、この日を迎えてしまったことで、もはやどんな言葉の応酬を交わしても自分の

不利が覆ることはない、と浩太は悟り始める。
こうなったら、もう逃げるしかない。
そう思考し、意識がエヴァから逸れる。逸れて、しまった。
「逃げることは許さん」
その致命的な隙を見逃すエヴァではない。
周りにいる生徒に怪しまれない程度に出力を抑えた瞬動で目の前に肉迫、肩を掴まれる。次いで、浩太の足を踏みつけることで機動力を奪った。
流れるような動作に周囲からおっー、と感嘆の声が漏れる。
耳元で底冷えするような声が響く。冷や汗が滝のように流れ、浩太は自分が釣り上げられた魚であり。もう逃げ場がないことを、理解した。
「黙って、大人しくこれを着ろ。でなければ――」
「な、何だよ」
「今後の修行は死ぬギリギリを攻める。死ぬか恥ずかしい思いをするか。二つに一つだ」
「――――着させていただきます」
それがトドメだった。
浩太は一切の抵抗を止めて、自らメイド服を着ることを選んだ。これ以上の抵抗は無

意味であり、まだ死にたくはないのだ。大人しくエヴァに従うことで、延命するしかない。

今後揶揄われることや写真に収められるリスクが頭にチラつくが、それはもはや栓なき事だ。

諦観がこもりにこもった乾いた笑いが溢れる。同時に、瞳から何か光るものが流れ出るが、誰もそのことに触れることはしなかった。

「すごーい！　え、本当に佐藤くんなの⁉？」

「ええ、そうよ。私にかかればざっとこんなものよ」

「本当にすごいよ篠崎さん！　もう男の子って最初に言われなかったら全然気付かないレベルだよ！」

（いや、それはそれで俺の男としての自信がなくなるんだが……）

女子たちに持て囃されて、まんざらでもない様子のエヴァがふふんと得意げに胸を逸らす。その拍子に豊満な胸が揺れ、男子たちからおおっ！　と鼻息が荒くなり、興奮した声が上がった。

騙されるな男子。それは偽物だぞ。
（いや、しかし本当にすごいな。エヴァがやったからってのもあるけど、メイク一つでここまで変わるのか……）
ウィッグをつけることで髪はセミロングほどの長さ。顔も男子にしては小顔の部類に入るため、つけまつ毛やファンデーション、口紅を使って整えることで街行く人十人に聞いて十人が女性だと答えるほどの仕上がりだ。
目の前に置かれた化粧鏡に映る自分を見て、浩太は女子が騒ぐのも納得できるな、と首肯する。
「ほら、男子たちの感想も聞いてみましょう」
「いや、そんなの聞くまでもないだろ？　さっきまで俺が女装させられているのを本人が目の前にいるのを憚らずに腹抱えて笑ったたんだぞ。俺が黒歴史晒して終わりだろ」
「さて、どうかしら」
エヴァは聞けばわかるわ、と浩太を立たせて振り返らせる。
するとどうだろうか。そこには、浩太の予想とは大きくかけ離れた光景が広がっているではないか。
振り返った浩太が見たのは、顔を赤らめてもじもじしたり、胸を押さえて崩れ落ちる

男子たちだった。
　状況が飲み込めず、呆然と立ち尽くす。
「……何だよ、その反応は」
「いや、その、な？　揶揄ってやる気満々だったんだが、思ってた以上にすごくてさ……」
「佐藤だって、わかってるはずなのに、一体何なんだこの胸の高鳴りは……」
「黒髪高身長スレンダーメイドとか俺の性癖にドストライク過ぎてヤバい。ヤバすぎる」
「はっ⁉？　佐藤は最初から男じゃなくて女だった、ってこと⁉？」
「んなわけねーだろ！　生まれた時から男だわ！」
　とち狂ったことを抜かし始めた男子たちに、なんとか状況を飲み込んだ浩太が怒鳴り返した。
「ね？　聞いてみないとわからないものでしょう」
「こんなことなら知りたくなかったよ……」
「まあ、正直私もここまでの出来に仕上げられるとは思わなかったわ。……本当は揶揄うつもりだったんだがな」
「おい、聞こえてるぞ」
　何でもないわよ？　と、エヴァは目を泳がせる。目は口ほどに物を言うとはよく言っ

たもので、動揺を隠しきれていない。むしろ、コイツ隠す気などないのではなかろうかと邪推してしまう。

　このロリ吸血鬼、どうしてくれようか。――俺が料理当番の時はしばらくにんにくをふんだんに使った料理を出すことにしよう。それもマシマシで。

　浩太はささやかな復讐を誓った。

「おや、これはこれはマドモアゼル。クラスの子、じゃないけれどどうしてここにいるのかな？」

　野生の池崎が現れた！

「おっと、そうかそうか。君、僕に会いに来てくれたんだろう。いやー参ったなぁ。カッコ良すぎるのも罪、考えものーーおや、急に抱きついてくるなんて情熱的ーー」

「ふんっ！」

「グハッ!?？　な、何故……」

　いまだ喋る池崎などお構いなしに、首元に腕を回して引き寄せ、無防備な腹へと膝蹴りを叩き込む！

　浩太が繰り出した膝蹴りは、正確に鳩尾へとめり込み、池崎は苦悶の声を出しながら床へと崩れ落ちた。

「ハッ!?？　しまった。あまりの気持ち悪さについ膝が」

「問題ないよ佐藤くん。むしろ余計なことする前に対処できてよかったよ」
来店する人たちの目が届かないところに捨てといて―、と委員長が支持を飛ばし、男子たちが池崎を引き摺っていく。全員の池崎に対するあまりにもぞんざいな扱いには流石に同情こそしてしまうが、普段の行いが行いなので助ける気が起きなかった。
「待てよ？　池崎が死んだのなら奴が着ている衣装を俺が着れば――――」
「浩太と奴の背丈が違うから無理だぞ」
「ガッデム！　そうだったよ。何でアイツは俺より身長が低いんだよ！」
「アイツ、１６５だものな。こうして考えると顔しかいいとこないな、マジで」
いや、本当にどう思い返してもアイツの良いところは顔以外出てこないな。顔以外も磨く努力をすればもう少し周りも態度を改めて――――無理か。ここまで酷い目にあっても、あのスタイルを崩さないのだからこれからも奴が改心することはないだろう。
朝から疲れることしかない。と浩太は深い溜息を漏らしたのだった。

――こうして、先行きに不安が残る学校祭がいま始まる。